
ポケモン 星の大冒険

カシスオレンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン 星の大冒険

【Nコード】

N4960H

【作者名】

カシスオレンジ

【あらすじ】

人間が存在しない、ポケモンの世界。平和なこの世界は、ある組織の登場によって平和が崩れていくのだった。

始まり（前書き）

どうも、カシスオレンジです。はじめて投稿したので、下手くそだ
と思いますが、これからよろしくお願いします。

始まり

ここは、人間がいない、とても平和なポケモンの世界。
しかし、その平和はある組織によって碎かれようとしていた……

「そのルカリオ、ここを通りたければ金を全部おいてけ！」
普通に歩いていたルカリオに集団がからまってきた。

「金？ねえな」

「うそつけ。いくらか持つてるんだろ？」

「お前らにくれてやる金はねえってことだ。」

そのルカリオが冷静に言った。

「てめえ、殺されたいか！おい野郎共、やっちまえ！」

ボスらしきドサイドンがいうと、その集団が一斉に攻撃してきた。

「はぁ、やれやれ。短気で困る。波導弾！」

ルカリオは襲い掛かってくる盗賊のような集団を1人ずつ波導弾で攻撃し、全員倒した。

「くそ、引き上げるぞ」

すると全員逃げていった。

「掃除完了（笑）」

この集団を追い払ったルカリオこそ、この小説の主人公・星^{ほし}である。

「しかし、最近盗賊集団ふえてきたな。さて、行きますか。」

星がやってきたのは1つの民家だった。

「おい、ソラゝいるか」

「星か、待ってたぜ。」

1匹のレントラーが出てきた。

このレントラーは星の大親友のソラだ。

「で、今日は何の用だっけ？」

「いやさ、最近変な集団やたらと増えてないか？」

「まあ、そうだけど。」

「俺達でその原因を探そうぜ。」

「いや、まあいいけどよ、どうやって探すんだ、星。」

「旅にでるのさ。」

星がいきなりすごいことを言った。

「旅か。いいね。俺達二人でか？」

「ああ、レンもくるぜ。」

「OK、いいよ。」

「じゃ、明日出発な。」

「分かった、じゃな」

そして星が帰っていった。

いよいよ星の冒険が始まる。

出発

翌日

「え〜と・・・オレンの実と・・・かこの実も持っていくか・・・あゝ畜生めんどくせゝ全部入れいっか。あとは野となれ山となれ（笑）」

朝から馬鹿をやっているのは星だ。

旅に持っていくものリュックに入れているようだが、結果は完璧にテキトーだ。

「じゃ、お袋、行ってくんぜ。」

「いつてらっしゃい。」

一方ソラは・・・

「親父、準備できた？」

ソラの場合はもつとひどい。

父親に準備をさせていた。

「はいはい、できたよ。こんくらい自分でやれ。ぶつぶつ・・・」

なんかぶつぶつ言っているが、そこはスルーしてもらえれば有り難い。

「いつてきまーす。」

「ぶつぶつ・・・」

「いつまでぶつぶつ言っただよ（汗）」

もう1人の仲間・レンはというと・・・
（ちなみにレンはバシャモです。）

「これはこうゆう時に役に立つだろう・・・これはこうゆう時に・・・」

二人と比べてかなりしつかり者だ。

「よし、父さん、母さん、行ってくる。」

「はい。」

「おみやげ買ってこいよ」（笑）」

「旅行じゃないから（汗）」

（集合場所）

「・・・遅い。遅すぎる！星はいつになったらくるんだ。」

「いや、レン？集合時間までまだ3分あるから。」

「馬鹿野郎！こつゆう時は集合時間より少し早く来るべきだろうが。」

「こもつとも。」

「俺に言われても（汗）」

「ぎりぎりセーフ！」

「やっと来たか、星。ちよつとそこに座れ。説教してやる。」

「だからレン、一応まにあつてゐるから。それに近所迷惑。」

「ちつ、まあいいだろう。」

「じゃ行こつぜ。」

「ところで星、どこ行くの？」

「あつ・・・」

「まさか考えてないとか。」

「その通りです。すいません。」

「じゃあここから一番近いセントシティはどうだ。」

「いいね。そこ行こつ。」

「ほんじゃ出発！」

「「おおー！」」

星達の旅はこつして始まつた。

このとき、この旅がとてつらいものになることは誰も知らなかつた・・・

山の中でおきた事（前書き）

セリフが多いのは勘弁してください（泣）

山の中でおきた事

星達はセントシティへ向けて出発したが・・・

「ぬおおおおおつつつ！！道に迷ったぞ！」

どうやら道に迷ったらしい。

「レン、こつちでよかったんじゃないのか？」

「おかしいな。地図ではこつちでいいはずなのに。」

「うわあああああ！どうすんだあああ！！！」

星がメチャクチャパニックっている

「落ち着け、星。電磁波」

「うぐつ。」

レンが暴走しかけの星を無理矢理とめた。

「もうちょつと行ったらつくはずだが・・・」

「たすけてーっ！」

どこから声がした。

「ん？何だ？」

「あつちからだ、行ってみよう。」

「さつさと金を出しやいいのに」

いつか登場したドサイドンが二匹のポケモンから金を奪おうとしていた。

二匹とも、ドサイドンの部下に捕まれて逃げられないでいた。

「くそつ、離せ！」

体が白と青で構成されている、外見がジェット機に似たポケモン・

ラティオスが必死に抵抗していた。

「離してください！」

ラティオスに良く似た青い部分が赤で構成されている、ラティアス

も抵抗していた。

「金を出せ。そしたら離してやる。」

「畜生、だれか助けてくれ！」

「無駄無駄。こんな所には誰もこな・・・

「こないこともないんだよな。」

そこに星が駆けつけてきた。

「げっ、てめえはあん時の！」

「そのとおり。とっとと離してやれ。それとも・・・」

「けっ、ほざきやがれ。俺を攻撃したら俺の部下がこいつらを殺すぞ。」

「残念。相手は星一人じゃないんだよ。それとお前の部下ならもう倒したから。」

いつの間にかソラとレンもきて、ドサイドンの部下を倒していた。

「次はお前だ！ドレイパンチ！」

「放電！」

「火炎放射！」

三人の技を一齐にうけて、ドサイドンは思いっきりダウンした。

「き、今日はこれくらいで勘弁してやる！あばよ！覚えてろ！」

捨て台詞をはいて、ドサイドンが逃げた。

「ふっ、掃除完了（笑）」

なぜ掃除なのかは無視してください。

「あの・・・」

ラティアスが少しもじもじしてる。

「ん？どした？」

「助けていただきありがとうございます。それと、私達を仲間に入れてもらえますか？」

「おう、いいぜ。仲間は多い方がいいしな。なっソラ、レン。」

「ああ。」

「うむ。」

「そっいえば自己紹介がまだだったな。俺は星。ルカリオの星。こ

「つちがソラとレンだ。」

「僕はシン。ラティオスのシンです。」

「私はミントです。」

自己紹介が終わった。

「自己紹介が終わったということで、とっとと山おりようぜ。」

「そーだな。」

「いや、迷ってたぞ、俺達。」

「あ・・・」

「シンとミントは道わかるか？」

「いいえ・・・」

「分かりません」

「・・・」

全員分からないらしい。

それから長い間、五人が山の中のさまよったの言っまでもない。

山の中でおきた事（後書き）

感想まっています！

セントシティ到着！新しい目標！（前書き）

なんか短い・・・

セントシティ到着！新しい目標！

「あー、疲れたー。」

前回、山の中で遭難してしまった一同はくたくたになって山からやつとおりれた。

ちなみに、もう真夜中の2時だ。

「寝みいー。みんなあ、早くポケモンセンターいくぞー。」

星はメチャクチャ疲れているっぽく、テンションが超低い。だらだら歩いているうちにポケモンセンターについた。

「ふあー。やつと寝れる。」

翌日

「ぎゃあああああああ！寝坊したあ！皆早くおき・・・ってあり？」

星を除いたメンバーは部屋にはいなかった。

手紙だけ、机の上においてあった。

「なになに・・・お前が全然起きないから先にいくぞ。情報集めしてるから、起きたらお前も手伝え　by ソラ　・・・マジかよ。おいていきやがって・・・しゃーない、行くか。」

一方ソラ達は・・・

「あの、最近変な集団が増えてますけど、原因とか知ってます？どんな小さいことでもいいので・・・」

「いいえ、全く。」

「そうですか・・・有難うございました。」

手紙に書いてあった通り、ソラは情報集めをしていた。

しかし、なかなか原因がつかめないようだ。もう3時間以上けいかしている。

「皆、なんかつかめたか？」

「・・・いや、全く。」

情報がつかめなかったのはソラだけじゃないらしい。

「ちつくしょー。星は？」

「皆、待った？」

やっと星が来た。

「やっと来たな。遅刻魔が。」

「はあはあ、なんかつかめた？ソラ。」

「全く。」

「じゃーさ、あっち行って見ようぜ。面白いもん見つけたから。」

「はあ？お前そんなのやってる場合じゃ・・・」

「まあいいんだって！さ、早くいこ！」

強引だ。

30分後・・・

「やっとついた、これだよ、これ！」

「・・・バトル大会？しかもこれから各地で行われるって・・・まさか星！」

「そ！どうせ何も情報を得られないならこれをやろうぜ。いいだろう、皆」

「俺はいいけど・・・」

レンは賛成のようだ。

「僕も構いませんが。」

「私も。」

シンとミントも賛成のようだ。

「はあ、やれやれ。じゃ俺も賛成で。」

ソラも賛成した。

「じゃ、決定！しかも全大会で、いい記録を残したら、最後にすごい大会があるらしいぞ」

「へえ。」

「じゃ、早速エントリー！」

「おい、これチーム制みたいだな。俺ら5人でチームだよな。チームの名前どうする？」

「ん。メテオっていうのは？」

「それで良いと思います、はい。」

ミントが賛成した。

「オツケー！決まり！」

エントリーが完了した。

星達の新しい目標が誕生したのだった。

セントシティ到着！新しい目標！（後書き）

感想・評価よろしくお願いします。

バトル大会開始！第一回戦（前書き）

まともなバトル書くの初めてだな。

バトル大会開始！第一回戦

〈大会会場〉

「大会開始まで3、2、1、0！スタートオオ！！さあ、始めりました！第1回、バトル大会・セント大会！実況は私ストライクです！早速いきましよう！第1回戦、メテオVSロック！ルールは勝ち抜きバトルで、相手を3回倒したら勝ち！」
実況のテンションがめちゃくちゃ高い。

まあ、当たり前なのだが。

テンション低い実況を見てみたいよ。

〈控え室〉

「星さん、どうします？最初は誰がいきます？」

シンが小声で星に聞く。

「そーだな・・・敵は岩タイプ中心だし、俺がいくか。」

「はい、分かりました。」

ロックチームは最初にゴローンで来るらしい。

相性的に星が有利だ。

〈会場〉

「星選手VSゴローン選手！はじめ！」

審判のゴリキーがはじめの合図を出すと、二人は同時に動いた。

「くらえ！はっけい！」

「守る！」

ゴローンがいきなり守るを使った。

「ドレインパンチ！」

「うぐっ！」

星のドレインパンチがきまった！が・・・

「くそ、全然きいてねえな・・・」

効果は抜群なのに全くきいていなかった。

「こっちからいくぞ！転がる！」

「しまっ・・・ぐは！」

「まだまだあ！」

転がる連発。

しかもどんな威力があがる。

「調子にのんな！高速移動！そしてボーンラッシュ！」

星が高速移動で転がるをかわし、ボーンラッシュで攻撃した。

「とどめ！ドレインパンチ！」

相手を倒し、体力回復。

これぞ一石二鳥（笑）。

「ロックチームの二番手はイワーク選手！」

イワークがステージに上がってきた。

「うつわゝ、でっけゝ。勝てるかな、俺。」

星の言う通り、めっちゃでかい。

こんな奴と戦えと言われると、やる気が失せる。

「はじめ！」

「波導弾！連発だ！オラアオラア！」

「穴を掘る！」

イワークが穴を掘ってかわした。

「あらま、どしましょ（笑）」

「くらえゝ！」

イワークが地面から出てきた。

「ウゲツ、はっけい！」

「ほげっ！？」

どうやらいきなり攻撃されるとは思っていなかったらしく、そのまま気絶した。

「うつしゃゝ！！二連勝！俺最強！」

調子に乗るな、雑魚が。

「少なくとも、お前よりは強い！」

ほざけ、この小説の作者は俺だ。

作者の力を使えばお前なんか一撃だ。

「ロックチーム三番手のバンギラス選手、もう後がない！」

「はじめ！」

「地震！」

「うげっ！」

いきなり地震を食らい、星は気絶した。

「おっと、星選手、敗れたり〜！メテオチームの二番手はシン選手！」

「負けませんよ！」

シンはやる気満々だ。

「フン、すぐに倒してやる。」

「はじめ！」

「エナジーボール！」

「そうはいかん！悪の波動！」

二つの技が相殺した。

「影分身！そして冷凍ビーム！」

「しまった！ぐわっ！」

バンギラスが冷凍ビームを食らって倒れたが・・・

「まだまだあ、悪の波動！そしてだましうち！」

「うわあああああああ！！！」

いきなり起き上がり、シンに攻撃した。

効果抜群でシンは倒れた。

「おおっと、バンギラス選手強い！しかし、もう体力の限界か？」

バンギラスは息が荒く、へとへとになっている。

「メテオチームの三番手はレン選手だ！」

「はじめ！」

「スカイアッパー！」

「くっ、守る！」

「火炎放射！」

「あぐっ、畜生！」

「とどめ！気合球！」

レンがとどめの気合球を放った。

「ぐああああああ！！！！」

流石のバンギラスも耐えられず、倒れた。

「第二回戦に駒を進めたのはメテオチームだ！」

実況が叫ぶと会場がかなり盛り上がった。

「ポケモンセンター」

「よっしゃー！！！！勝ったど〜！」

なんかどこかの芸人っぽい。

「勝ったぜ！でも、俺試合出れなかった・・・」

ソラがちよつといじけている。

「まあ、いいじゃねーか。次の試合は明日だからもう寝ようぜ。」

「そうだな！」

「枕投げやらない？」

「子供かお前は！」

こんな感じの状態のしばらく続いたが、その後は全員すぐに寝た。

バトル大会開始！第一回戦（後書き）

感想待ってます！

ライバル登場！前編

バトル大会第一回戦を勝ち抜いたメテオチーム。

どうすごしてるかというと・・・

「ポケモンセンター」

「あゝ暇だ。ソラゝ試合いつ？」

「午後2時。」

現在午前10時。

開始まで4時間ある。

「あゝ暇！超暇だからバトルさせろ！しかも暑い！」

38 だからイライラするのも仕方がないが、うるさい。

「」「」「黙れ（黙ってください）」「」「」

全員一斉に同じことを言った。

「ちっ、会場で試合見てくる。」

「戻ってこなくていいぞ。」

「黙れ、クソレン！」

「会場」

「あー、ちつくしょう！あいつらめゝ覚えてやがれゝ」

愚痴をいつている。

「にしても強い奴いねえな。全員へばい。」

席であくびしながらだらけてみている星。

相手は一生懸命やっているが、星からみたら雑魚だ。

しかし、あるポケモンの登場で、星の態度が180。変わるようになる。

そのポケモンは一見普通のジュカイン。特に変なところはない。

「リーフチームVSパワーチーム！最初はジュカイン選手VSエビワラー選手、はじめ！」

はじめの合図がかかった瞬間、エビワラーが倒れた。

「はい、終了。」

いつの間にか、ジュカインがエビワラーの後ろに来ていた。なんと開始から0.3秒でジュカインが勝った。会場がシーンとしてる。

星までもが啞然としていた。

「ジュ、ジュカイン選手の勝ち。パワーチーム次の選手を。」

審判がそう言うと、カイリキーが出てきた。

「はじめ！」

「うおおおお！地獄車！！！」

カイリキーが大技をかけてきた。

「影分身。高速移動。剣の舞。リーフブレード。」

一瞬で4つの技を出し、カイリキーを攻撃した。
息ひとつ乱れていない。

「グエツ！」

カイリキーが倒れた。

「すげえ……。あいつと戦ってみたい！」

星が戦いたくなったようだ。

拳を握りしめているし、武者震いをしている。

「パワーチーム、次の選手を。」

「うおおおお！やってやるぜ！！！」

サウムラーが走って出てきた。

「はじめ！」

「メガトンキ・・・」

「エナジーボール」

「ウゲゲゲゲゲ！！！」

サウムラーも秒殺だった。

このジュカイン、めちやくちゃ強い。

「勝利したのはリーフチームです！すごい選手が現れました！」

「控え室」

「いつも通り秒殺だったね、ハット。」

ハットと呼ばれたこのポケモンこそ、さっきのジュカインなのだ。

「相手が弱すぎるからだ。少しは骨のある奴がいるかと思ったが・・
」

「おい、お前さっきのジュカインだよな？俺とバトルしてくれ。」

星がリーフチームの控え室に入ってきた。

「俺とか？いいだろう。」

「そうこなくちゃ。練習用コートでやろう。」

「コート」

「そっちから来い。」

ハットが先制を星にゆずった。

「なら、行くぜ！マッハパンチ！」

「見切り。ギガドレイン。」

マッハパンチをかわし、ギガドレインで攻撃した。

「そうはいかねえ！波導弾！」

「フン・・少しはできるみたいだな。」

「くそ、可愛くねえな。俺のオリジナル技を見せてやる！」

そういうと、星が力をため始めた。

「食らえ！波導流星群！！」

空に100以上の波導弾が現れ、しかもサイズが一回り大きい。

「くっ、何だあれは！」

「俺の必殺技さ、終わりだ！」

「くっ・・・ぐわあああ！！」

ライバル登場！前編（後書き）

後書きってどうやって改行するんでしょうか。だれか教えてください
い

ライバル登場！後編！

くコートく

「どうだ、俺の必殺技は！」

波導流星群という技を放った星が、得意そうにしていた。
煙で、ハットの姿があまりよく分らない。

「・・・フッフ・・・フハハハハ！それで俺を倒したつもりか？」
ハットの体には多くの傷がついていたが、深いものはない。
「何っ！？そんなはずは・・・」
星は正直、かなりあせっていた。

「次は俺の必殺技を見せてやろう・・・ムンッ！！」
ハットの周りに竜巻が現れた。

「食らえ、ジャングル・オブ・ハリケーン！！！」

巨大な竜巻が星に向かってきた。

「ぐわあああ！くっ・・・ハア・・・ハア・・・」
物凄い威力のようだ。星はなんとか立っていられたが、ふらふらだ。

「どうだ、力の差が分かったか・・・うぐっ・・・」

ハットが倒れた。反動のダメージが大きかったらしい。
呼吸が荒い。

「ヘッ、お前は限界らしいな・・・だが、俺はまだ行けるぜ！」

星には、まだHPが残っているようである。

「ちっ・・・まだ倒れねえか・・・グフッ！」

「今だ！インファイト！」

「ぐわああああ！！！」

バタツと音と共に、ハットが倒れた。

「へへっ・・・勝ったぜ！」

星はまだ余裕のようだ。

「あばよっ！」

「・・・待て・・・」

つらそうにハットが星を呼び止めた。

「ん？何か用か？」

「・・・次は負けない。」

「俺も、お前には負けないぜ。」

「ポケモンセンター」

「何やってきたんだ、星。ボロボロじゃないか！」

星はボロボロになって戻ってきた。

「いや、ま、ちょっとね。」

「ったく・・・今日お前試合に出さないからな。」

「ええっ！？そりゃねえぞ！」

星が必死で反論しているが、レンとソラに無視されている。

「星さんて面白いね、兄さん。」

「そうだな。」

ラティ兄妹が、慌てふためく星を楽しそうに見ていた。

ライバル登場！後編！（後書き）

感想・評価待ってます！

苦戦！？VSダークチーム

（会場）

第一回戦を勝ち抜いたメテオチームは、第二回戦を迎えようとしていた。

「さあ、第二回戦です！メテオチームVSダークチームの始まり始まり！」

相変わらずテンションが高い。
高いぞ、ストライク。

「さうで、俺が全員ぶっ潰してやるぜ！」

「星、駄目だから。さっきから言ってるけどお前休んでろ。」

ハットと戦い、大ダメージを食らった星は試合出場ができる体ではなかった。

しかし、バトル好きな星は休んでる事などできる訳がない。
メチャクチャ駄々をこいていた。

「嫌だ、俺はやる！」

「駄目ってつたら駄目！いい加減諦めろ！」

（我侭な奴だ。俺は出来れば出たくないのに。）

ソラがひそかにそう思っていた。

「え、では両チーム、最初の選手を。」

待機時間が終わったらしい。

「よっしゃ、俺が！」

「駄目。ソラ、頼む。」

「しょうがないな。俺がやるか。」

「そんな〜（泣）」

メテオチームは、ソラに決定したようだ。
星が飛び出ようとしたが、レンに押えれた。

「はじめ！」

合図がでた瞬間、敵のゲンガーが消えた。

「どこに消えやがった、あの野郎！」

「ケケケケ、シャドーボール！」

ゲンガーが姿を消したまま、シャドーボールを撃った。

「畜生が、10万ボルト！」

ソラが10万ボルトを放ったが、全然あたってなかった。

「ケッケケケケケ！シャドーボール乱れ撃ち！」

「うわあああ！！！」

シャドーボールを全て食らい、虫の息になったソラ。
意識が少し朦朧としている。

「終わりだ！シャドーパンチ！」

「はあはあ・・・ぐわあああああ！！！」

遂に、ソラが倒れた。

「ソラ選手敗れた〜!!」

「ソラ！大丈夫か!?」

星がすぐ、ステージに飛んできた。

「大丈夫に・・・見えるか？へへっ、俺としたことが、油断しちゃった・・・」

「もう休んでな、ソラ。あいつは俺がやる。」

星はゲンガーを倒すことを決めたようだ。

「いや・・・私がやります!」

二人の後ろで、ミントが叫んだ。

「ミント・・・。」

ソラは驚いていた。

当たり前だ。相性最悪。

勝てる見込みはわずかなのだ。

「星さん、私にまかせて下さい!」

「・・・・・・ああ。」

どうやら、ミントの熱意に負けたりしい。

「ミント選手、どうぞ!」

ミントが前に進み出ると、構えた。

「はじめ！」

「（相性が悪い……。早くしないと……。）竜の波導！」
「ケケケ！影うち！」

竜の波導と、影うちが相殺した。

それと同時に爆風からミントが突進して来た。

「金縛り！そして流星群！」

「ウゲゲゲゲゲ！？」

物凄い素早さで一気に決着をつけた。

「おっと、ゲンガー選手敗北！次の選手を！」

「ふっ、この俺様ヨノワールが行こう。」

リーダーらしきヨノワールが出てきた。

「はじめ！」

ドガッ！

なにやら鈍い音が聞こえた。

「うつ……。」。」

「グハハハハハハ！雑魚が！」

どうやらヨノワールがシャドーパンチを打ったらしい。

「くっ、まだまだ！冷凍ビーム！」

「目障りだ、蠅^{はえ}が。催眠術。」

ミントが眠った。

「悪夢、シャドークロー！」

ミントは全然目覚めない。

「とどめだ、シャドーパンチ！」

ミントはたおされた。

「おおっと、ミント選手、奮戦するも、やられた〜！」

「・・・レン。もういいだろ」

「まあ、いいか。俺はもうとめない。」

どうやら星に決定したようだ。

「はじめ！」

「終わりだ、ラスターカノン。」

超威力のラスターカノンが決まり、ヨノワールは倒れた。

「残念ながら、ヨノワール選手敗北！最後の選手を！」

「オレガヤル！」

ヌケニンが出現した。

「いいぜ、来いよ！」

「では、はじめ！」

はじめの合図がでた。

「剣の舞！そして、メタルクロー！」

「ムダダ、オレニハソンナモノキカナイ。」

効果抜群の技しか効かないヌケニンには、無駄だった。
しかし、星はそんなことは知らない。

「星、効果抜群の技を！」

「しゃどーぼーる、ギンイロのカゼ！」

星はヌケニンに連続攻撃され、思わず怯んだ。

「トドメダ、しゃどーぼーる！」

星は倒れてしまった。

「おおっと、星選手、やられた。準決勝に進むのは、ダークチー
ムだ。」

「・・・星。」

レンが、そうつぶやいた。

「・・・待てよ・・・。俺はまだ負けない！」

「シッコイヤツメ、キエロ！」

「てめえがな！シャドークロー！」

「グワアアア！」

効果抜群のシャドークロウを食らい、遂にヌケニンはやられた。

「準決勝に進んだのはメテオチームだった〜！」

その後、ポケモンセンターに帰った一同が馬鹿騒ぎしてラッキーに怒られたのは、また別の話

苦戦！？VSダークチーム（後書き）

星「おお、勝ったか〜！」

ソラ「ミントが奮戦するとは・・・」

いやさ、もともとミントを空気化するつもりはなかったんだよ。
でも気がついたら、空気なっちゃって。

ソラ「だからか。」

星「てか何で全然更新しなかったんだ？」

旅行いっててさ、出来なかった。

星「へ〜、そうなんだ。」

ま、これからは更新するから。

準決勝！（前書き）

星「てめえ随分長い間更新しなかったな（怒）」

ソラ「この世の地獄をみせてやろうか（怒）」

あゝあ、そいつは勘弁。もう地獄みたから。

ソラ「どうということだ？」

僕さ、前旅行行ったって言ったでしょ？

それが海外旅行でさ、空港行ったのよ。メツチャ色んなところから人くるだろ？

そこである病気に・・・。

星「ま、まさか・・・。」

そのまさか。現在大流行の新型インフルエンザに。

星「身近な奴でかかる奴がいたとは・・・。」

皆さんはかからないように、手洗いうがいをしっかりと！

準決勝！

「バトル大会、準決勝！メテオチームVSエスパークチーム！」

もはや、テンションが高いとか、盛り上がってるとかじゃない。

うるさい。あまりの煩さに、木の枝に止まっている鳥が逃げ出すほど。

「ふう、遂にここまでできたか。」

星がつかれたように言った。

「ま、苦労すんのはこれからだよ。あゝやだやだ。」

ソラがメンドくさそうにしている。しかも欠伸つきで。

本人にそのつもりはなくてもエスパークチームのメンバーはこう思っていた。

なめられてる………と。

「さて、どうやる？俺は相性わるいぞ。」

「俺も鋼もってるけど、あいつらに効く技はあまり……」

星とレンはどうもやりにくいらしい。

「僕が行きましようか？その後にミント、ソラさんの順でいけば何

とか・・・」

「ゲッ！？俺もやんの！？」

何こいつ、なんで驚いてんの？一応メンバーでしょ？という質問はひかえて頂きたい。

ソラはとてもメンドくさがり。

前回試合にでたため、もうでなくていいやと思っていたのだ。

「星さんとレンさんは戦いにくいし・・・」

「なあ、シン。前から気になってたんだけどよ、そのしゃべり方何とかなんない？」

「・・・はい？」

星がいきなりズレた事を言い出した。

みんな意味が分からないらしい。

「あの、それどう言うことですか？」

「だからさ、その堅苦しい敬語は嫌だと言ってんの。」

どうも星は敬語が気に入らないらしい。

「あと、ミントも。」

「わ、私も？」

完璧に2人から敬語という存在を消すつもりらしい。

「はぁ・・・分かりました。じゃなくて、分かった。」

「でも、私は・・・」

ミントはためらっているらしい。

「いいから堅苦しいのは止めなさい！」

「・・・うん。」

なんとか敬語を止めたようだ。

「じゃ、そろそろ・・・僕が行こう。」

ステージでサーナイトがシンを待っていた。

「準決勝、はじめ！」

「サイコネシス！」

サーナイトがシンを攻撃した。が、効果が薄い。

「残念だけど、君には早く倒れてもらおう！シャドーボール！」

サーナイトには効果抜群の技だ。

「うわっ！」

間一髪、かわした。

「そこだ！念力！そして流星群！」

念力で動きを止め、超威力の流星群で、サーナイトを倒した。

「おおっと、強い！開始1分で敵を倒した！」

お願いだからお前は黙ってろ。

鼓膜が破れる。

「全く・・・だらしない。このメタグロスの力を見せてやるとするか。」

「メタグロス・・・はあ・・・やりにくい。」

あまり、メタグロスに効く技がないため、とても倒しにくい。

「はじめ！」

「バレットパンチ！」

いきなり得意技。

しかし、素早さはシンに遠く及ばないため、なかなか当たらない。

「あゝやりにくい！とりあえず竜の波導！」

メタグロスに効く技を持っていないシンは、適当に攻撃した。

しかし、当たり前のことだが、効いてない。

元々攻撃が効かない上、サーナイト戦で特攻が下がっているため、メタグロスにとっては蚊に刺されたくらいのダメージしかない。

つまりこの戦い、シンが圧倒的に不利なのだ。

「ギブアップしたほうが身のためだぞ、シャドーボール！」

「くそ、ラスターパージ！」

2人の技は相殺し、大きい爆発が起こった。

「うつ・・・・・・」

「早く諦めろ。」

シンはとてつもなく大きいダメージを食らったが、メタグロスには傷1つ付いてなかった。

「はぁ・・・はぁ・・・」

「面倒だ、バレットパンチ。」

「うわああああー！！！」

限界のシンに、とどめのバレットパンチを使い、倒した。

「メタグロス選手、勝利！」

「あいつなら、俺がいこう。」

レンが出るようだ。

「フン。雑魚が……」

メタグロスはなめていた。

「雑魚か……。それはどうだろうな。」

レンは物凄い覇気を出しており、並のポケモンならば、戦わずに降参するほど。

だが、それはあくまで、普通のポケモンのことだ。

しかし、レンの相手は並のポケモンではないのだ。

（何だ？こいつから感じる闘気は……。）

「はじめ！」

はじめの合図がなった瞬間、レンが消えた。

「何っ！？どこに消えた！？」

「後ろだ、炎のパンチ。」

レンは一瞬でメタグロスの後ろに回り、効果抜群の技で攻撃した。

一瞬であるメタグロスに大ダメージを与えたので、驚きのあまり会場はシーンと静まり返った。

「く、くそ、サイコネシス！」

「こんな物・・・はっ！」

メタグロスはサイコネシスで反撃し、レンを投げ飛ばそうと思ったが、レンは気合でサイコネシスを吹き飛ばした。

「な、何て奴だ・・・、レベルが違う・・・」

「終わりだ、大文字。」

「ぐわあああああ！！！！！」

必殺技の大文字で、メタグロスは倒れた。

「ソ、ソラ・・・、レンってあんなに強かったか・・・？」

「よく分かんないけど、強すぎだって・・・。」

「凄い・・・。」

「僕が負けた相手を簡単に倒すなんて・・・。」

メンバーも驚きを隠せない。

全員あんぐりと口をあけている。

「次の選手をお願いします！」

しかし、誰もステージに上がってこない。

「あ、あのバシャーモの強さは半端じゃねえよ」

「あんな奴とやるなんて・・・じよ、冗談じゃない」

全員レンの強さに怖気付いたようだ。

「だれも出てこない！？これはギブアップか！？」

ストライクは大声で言ったので、またまた煩かった。

「・・・わしをやろう。」

フリーデンが前に進みでた。

話し方や、声などでかなり年をとっていることが分かる。

「はじめ！」

「行くぞ若いの！金縛り！」

「なっ！？」

フリーデンはレンを金縛りで動けないようにした。

いきなり最悪の状態に陥った。

「くそっ！どうすりゃいいんだ！？」

「残念じゃ、若いの。もう終わりじゃ、念力！」

「うつ……」

レンは気絶した。

効果抜群の攻撃が原因。

「くっそ、俺がぶつつぶす！」

「何いつてんだ、お前はやりにくいつて言っただろ？」

「あんな強い奴と戦わないなんて勿体無いつて！」

どこまでバトル馬鹿なんだ、お前は。

「ホホホ！まだ強そうのいたわい。」

「燃えて来たぜ！」

「はじめ！」

その瞬間、2人が消えた。

どうやら、超スピードで動き回っているようだ。

「メタルクロー！」

「無駄だ、金縛り！」

星が縛られ、ステージに現れた。

「サイコキネシス！念力！サイコウェーブ！」

技3連発で超ダメージだ。

「ぐわあああ！！はぁ・・・はぁ・・・」

虫の息だったが、何とか大丈夫なようだ。

「しつこいのう、サイコウェーブ！」

とどめをさそうとしたその時！

「うおおおおおおお！！！！！」

星の体から金色のオーラが出て、金縛りを無理矢理解いた。

「くらえ、波導砲！」

金色のオーラを纏った星が、波導弾の10倍の威力はある波導弾を出した。

「ぐっ、何のこれしき！」

「くたばれ！ヘル・インファイト！」

「ぐわあああああ！」

「うつ．．．。」

フリーデインはインファイトを超えた技を食らい、倒れた。

しかし、星から金色のオーラが消えると、星も倒れそうになった。

「決勝戦に進むチームはメテオチームだ！」

遂に決勝戦進出がきまった。

しかし、星のこの謎の力は一体何だろうか。

準決勝！（後書き）

星「なあ、俺のあの力何？」

あれ？いずれ分かるよ。

星「気になるから言え！」

ヤダ。ネタバレになるから。

ソラ「俺も気になるぞ〜！」

こうなったら・・・

星「こうなったら？」

逃走！

ソラ「ちっ・・・逃げられたか。じゃ、次回をお楽しみに。」

東の間の休息、謎の組織・『デス』（前書き）

いよいよ決勝戦・・・・・・・・ではなく、休息！

星「ええ得獲江枝画絵ゑゑゑ！！！！」

どんな驚き方だw「え」をとんでもない事にするな。

ソラ「あゝ、良かった。もう面倒なのは御免だぜ！」

フフフフフ、どうかな・・・・？

シン「なんかやんの？」

別に何もやらないけどね。

星「ガクッ！なんじゃそりや（汗）」

というのは嘘、今回は物語が動きだすよ・・・・・・・・

ソラ「ええゝ！メンドイって！」

お前今回どーでもいいから。

ソラ「マジ！？やったゝ！」

普通は出番欲しがするのに・・・・・・・・まあいいや

ではどうぞー！

束の間の休息、謎の組織・『デス』

「ふう、今日は一日中寝てよ。」

早速電気の虎が怠けている。

もう正午だぞ。いい加減起きろ。

「何言ってるんだ、特訓だ特訓！」

「あ、僕も行くよ！」

星とシンは特訓にする為、どつか出かけた。

「レン、ババぬきしない？」

ミントがトランプを出して、シャッフルしている。

「ソラとやってな、俺も出かける。」

レンもポケモンセンターから出て行った。

「あゝあ、ソラ弱いんだけどなあ」

「何それ、なんで俺がやるってことになってんの？てか何で俺がトランプ弱いって知ってるの？」

「テレパシー」

「……………。寝る」

本気で一日中寝てるつもりらしい。

何かやれよ（笑）

く星&シンく（これから、それぞれの休息を書いていきます）

「オラオラ！インファイト！」

バトルの練習をしている模様

というかいきなりインファイト………防御が大変になるぞ。

「そうは行かないよ！ドラゴンクロー！」

「ぐえっ！」

見事にクリスティカルヒット！

急所に命中だ〜！

「くっそ〜、波導弾！」

「うわっ！」

こっちもクリティカルヒット！

「「実況うつせえ（うるさい）！」」

折角実況してやったのに……

「竜の息吹！」

「そうはいかねえ！神速！そして竜の波動！」

シンの攻撃を神速でかわして、そのままそのスピードで後ろに回りこんだ。

さらに効果抜群の竜の波動を使って攻撃した。

「ハア……ハア……流石だね、星。」

「まだまだこれからさ！必殺・波導流星群！」

オリジナル技で攻撃、広い範囲に大ダメージを与える為、いくら素早さが高くても避けようがない。

しかし……………

「フッフ、甘いね！テレポート！」

「何っ！？」

何とテレポートで逃走した。

「どこ行った！？」

「ここだよ！竜星群！」

今度はシンが後ろに回りこみ、竜星群を放った。

「くそ」

「僕の勝ちだね」

「へへへ、俺の新しいオリジナルを見せてやる！奥義・テラインパクト！」

ギガインパクトならぬテラインパクト。

ネーミングセンスないのは勘弁して下さい（泣）

「うわああああ！」

しかし、威力はデカイらしい。

「逆転だな！」

という訳で星の勝利。

ズゴオオオオオン！！！！

「な、何だ！？」

どこからすごい音が聞こえた。

「行って見よう！」

くソラ&ミントペア

「ソラくやるうよ」

「ヤダ！俺は寝る！寝て過ごす！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。説明するの
めんどくさい状況。

ここはいいや。

「「っておい！」」

くレンく

「かなり遠い所まで来てしまったな……。この辺に洞窟があると聞いたんだが……。」

洞窟を探しているみたいだ。

「ん？あれか！？」

穴発見、ダッシュで移動。

「やっぱりここか……。」

レンはおそろおそろ中に入ってしまった。

30分後

「こ、これは……………」

洞窟の一番奥にはどう見ても、天然のものではなく、誰かによって造られた扉があった。

「気合球！スカイアッパー！インファイト！」

しかしビクともしない。

「くっ……………少し休むか。」

レンが石の上に座ったその時！

[illegible]

扉が開いた。

「こんな仕掛けに……。む、あれは？」

扉の奥には首飾りがおいてあつた。

その隣に、紙があり、こゝ書いてあった。

世界が破滅の危機におちいし時

波導を操るものと

電気を操るものと

炎を操るものと

超能力を使う龍の兄妹とが

宝を手に入れし集う時

世界に再び平和が訪れる

新たな平和が来る事を願い

この波導の首飾りを選ばれし者に授けよう

「これは……。」

レンも驚きを隠せない。

なぜならこれはメテオチームのメンバーと完全一致してるからだ。

「波導……間違はなく星だ。帰って知らせなければ……」

・・・」

「そうはいかん、その首飾りは渡してもらおうか。」

レンが洞窟から出ようとした時、入り口から声が聞こえた。

「誰だ！？」

「わが名はシーク、『デス』の幹部だ！さあ渡してもらおう！」

入り口に立っていたカメックスは自分をシークと名乗り、戦闘態勢に入った。

「断る！高速移動！」

素早さを上げて、シークから逃げようとした。

「遅いな・・・ハイドロポンプ！」

だが、シークはレンの動きを見切り、命中率の低いハイドロポンプを命中させた。

「くそつ、強い！高速移動！」

また高速移動。だが二回やったら相当のスピードになる。

さらに、カメックスという種族自体はあまり素早くない。

「逃がさん！波乗り！」

近くにあった海に乗り、猛スピードで突っ込んだ

「し、しまった！」

「「竜の波導！」」

波乗りとレンの後ろから飛んできた竜の波導は相殺した。

「大丈夫か、レン！」

竜の波導を使ったのは星とシンだった。

「雑魚がいくら群れても無駄だ……。」

「そいつはどうかな？」

「お前に負けないよ！」

シークとの戦いが始まる……………

束の間の休息、謎の組織・『デス』（後書き）

星「物語が動き出すってこういう事か・・・」

ミント「なんか次回は凄い事になりそうだね。」

かなりベタかな？まあいいや

ソラ「いいのかよ・・・」

じゃ次回もお楽しみに！

レン死す！？シークの實力！

「ハイドロポンプ！」

「波導弾！」

「竜の息吹！」

シークと星＆シンの技が相殺した。

「フハハハハハハ！その程度の実力で俺様に挑むとは！フハハハハ！」

「星、ここは僕に任せて！」

シンが単独で挑むつもりらしい。

完全に無謀だ。

しかし、シンは少し笑っていた。

「馬鹿が、お前ごときに俺様に敵うと思うか！」

「思ってるよ！エナジーボール！」

シンの狙いは効果抜群の技でダメージを与えることらしい。

しかし、そう簡単にはやられてくれないのは、3歳の子供でも分かることだ。

星もレンもシンの考えが分からない模様。

「馬鹿があ！冷凍ビーム！」

「馬鹿はお前だ！サイコネシス！」

シンはサイコネシスで冷凍ビームを撥^はね返した

「む、そうはいかん！奥義・アクアボール！」

シークは冷凍ビームをかわして、巨大な水の玉を作った。

「かかった！怪しい光！」

「な、何！？」

何とシンの狙いは、混乱させて、シークが作った大技をシークに当てさせるという事だったのだ。

効果は薄いとは言え、シークの奥義の威力は半端なものではないのだ。

「よし、詰みだ！エナジーボール、10万ボルト、雷！」

シーク自身の技に加え、効果抜群の技で超大ダメージだ。

「すっげー！！シン！」

「そう？ははは！」

二人ではしゃぎ始めた。

「消える．．．．．アクアブレイク！」

しかし、その喜びも束の間、シークは起き上がり、アクアボールの100倍はある巨大な玉で攻撃した

「「うわあああああ！」」

アクアブレイクは直撃したかと思われた。

「消えたか．．．．．っ!？」

しかし、二人とも無事だった。

「ぐふっ．．．．．け、怪我は．．．ないか？」

レンが体中傷だらけで倒れていた。

「な、何やってんだよ!? レン！」

「．．．ハア．．．ハア．．．受け取れ、星．．．お前が手に入れるべき物だ．．．」

そう言つて、波導の首飾りを星に渡すと、レンは目を閉じた。

「レン．．．．．ありがとう。おい、てめえ今すぐぶっ殺してやる!」」

星は首飾りを首にかけ、攻撃体勢に入った。

「クククク・・・貴様も死ねえ！アクアブレイク！！！」

また、直撃して、爆発が起こった。

「今度こそ・・・ば、馬鹿な！？」

何と星は平気だという顔をして立っていた。

煙が晴れると星の体の周りには、金色のオーラが出ていた。

「く、くそ！もう一発！」

「芸のない野郎だ。音速移動！そしてヘル・インファイト！」

星は一瞬でシークの前に来て、究極のインファイトを発動させた。

「ぐっ！」

「もう消える。無限・波導流星群！」

本当に流星群の星の数ほどある波導弾で攻撃、大爆発を起こした。

「・・・・・・・・勝った・・・・・・・・」

星はそれだけ言うと、倒れた。

く???く

謎のアジトで、二人の影がモニターを見ていた。

「・・・シークがやられたか・・・次はお前だ、グルス」

「承知」

そう言うと、一人の影が消えた。

「今は我慢だ・・・もうすぐで我が野望は完成する・・・フッフ・・・フハハハハ！」

レン死す！？シークの実力！（後書き）

レン「俺死ぬの？」

どうだろうね。死ぬ可能性はあるよ。

星「レン死なすなよ。」

考えといてやるよ。

星「てか最後の誰？」

さあね？

レン「教える。」

却下。忍法・逃走の術！

星「また逃げられた…………次回もお楽しみに！」

危機一髪、明かされた星の力

「・・・・・・・・ん、ここは・・・・・・・・？」

「やつとお目覚めかよ、寝坊くん」

起きたばかりの星の耳に入った言葉は、挑発にしか聞こえなかった。

しかし、いちいちそんなソラに構っていたら、限がない。

なので挑発は無視ということに。

「俺は一体何を・・・・・・・・そうだ！あのシークとかと言う奴と闘って・・・・・・・・それから何も覚えてねえ・・・・・・・・そうだ！ソラ、レンは！？」

どうやらレンの事を思い出したようだ。

しかし、ソラの表情は暗かった。

「そ、ソラ？どうなんだよ？」

表情からして、大体悟ってはいたが、一応聞いてみた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・最悪な状況だ。
多量出血、全身の粉碎骨折とかで、生きてたのが不思議なくらいだ。
・・・・・・・・・・・・・・・・」

「う、嘘だろ？何で……」

星達に突きつけられた現実が重かった。

仲間の一人がすぐにでもこの世から消え失せそうだった。

流石のソラもメンドくさいなんて言えなかった。

「……シンは？」

「あいつは軽傷だ。心配はない。」

シンは、レンがシークの攻撃から二人を守った後、レンを連れてポケモンセンターに帰った。

その後、ソラとシンが駆けつけてきて、星も助けた……
という訳だ。

「それともう一つ、お前の謎の力はシンから聞いた。そして、偶然ここにいた研究者に聞いたら、どんな力かが分かった。」

「……何だ？」

小声で星はソラに聞く。

「その力……古代の戦闘民族の力だ。しかし、その民族の中でも100万分の1の割合でその力を持つ奴が生まれて来ると言われている。戦闘や経験で少しずつ目覚めさせていくものらしいが、特別なアイテムを手に入れると、自由自在に制御できるようになる。」

特別なアイテムと言うのは、波導の首飾りのことだ。

「・・・・・・・・分かった」

そう言つと星はベットから立ち上がり、ポケモンセンターから出て行った。

「おい、お前まだ動ける体じゃ・・・」

「一人にさせてくれ」

外には土砂降りの雨が降っていた。

まるで神がレンの災難を悲しんでいるようだった。

「・・・・・・・・畜生!!!!!!」

そう叫ぶと、近くにあった木を殴った。

よく見ると、星の目からは涙が流れていた。

「俺のせいで・・・俺にもっと力があつたら・・・・・・・・」

「・・・・・・・・星、まだ死んだ訳じゃない。助かる可能性はあるんだ。とは言つても、0に近いが・・・・・・・・。」

ソラも雨に濡れながら、外に出てきた。

「だけだよ・・・・・・・・」

「あいつを信じてやろっぜ。俺達のところに戻ってくるって」

「…………おっ」

そう言つと、二人はレンの所へ行つた。

(ここは・・・どこだ・・・？俺は一体・・・？)

何もない空間で、バシャーモが倒れていた。

言うまでもなく、レンだ。

(確か、シークと言う奴と闘って・・・それで、星達を庇って・・・そうか・・・俺は死んだのか・・・)

か・・・こ・・・

(・・・！？誰だ！？)

しかし、それから何も聞こえなくなった。

(気のせいか・・・)

かえ・・・こ・・・

(いや、違う！これは気のせいじゃない！誰だ・・・？)

かえ・・・こ・・・

（何だ！？何を言っている！？）

かえってこい

（かえってこい？）

レン！帰って来い！

（俺を呼んでいる・・・この声は・・・星・・・？）

死ぬな！

（・・・俺はまだ死んでいない・・・？なら、まだ生きれるのか・・・今、そっちに行くよ。）

「レン！レン！起きろ！」

星が叫んでいた。

「……………星？」

レンの声がした。

「れ、レン！？大丈夫か！？」

「ここは・・・・・・？」

完全にレンの意識は戻ったようだ。

医者は奇跡だ！奇跡が起こったぞ！と叫びまくっている。

「やったぜ！」

「ああ・・・・・・。」

レンはなんとか復活した。

その後、ポケモンセンターの全員が馬鹿騒ぎをしたとさ。

危機一髪、明かされた星の力（後書き）

レン「死なずにすんだ」

だね。僕も書いてドキドキしたよ。

星「脅かすなよ、心臓が飛び出すかと思ったよ」

ソラ「全く……」

にやはははは（汗）

レン「ま、これからも宜しく。」

そして次回もお楽しみに

決勝！星VSハット！（前書き）

星「やっと決勝か」

うん。なんだかんだ言っで、まだ大会終わってなかったから。

星「対戦チームは？」

読めばいいだろ、自分で。

星「ちっ、じゃどうぞ！」

決勝！星VSハット！

ザワザワザワ……

妙に会場がざわついている。

まあ、決勝戦だからというのもあるが、さらに多いのはレンファンの声だ。

レン様〜なんというお姿に〜とかきや〜なんて事〜！？とか。

意外ともてるらしい。

そこ、羨ましいと言わない。

「え〜、遂に決勝戦です！！メテオVSリーフです！！！」

相変わらずやかましい実況だ。

しかも、今日は立って、全力で叫んでいる

「何か久しぶりだね。」

「うん。」

確かに何か久しぶりな気がする。

しかし、チームメテオには一名大怪我している奴がいる。

言うまでもなく、レンだ。

なので、レンは試合参加不可能という事に。

「敵はハットか……敵全員草タイプだし……レンが出れないと時間がかかるなあ」

「おい、星。誰だそのハットって言うのは？」

以前、星はハットにバトルに挑んだ事はソラ達には知られていなかった。

なので知られていないのも当たり前だ。

「ああ、言ってなかったっけ？向こうのチームの大将だよ。滅茶苦茶強いぜ」

「へー、僕、その人と闘ってみたいな」

以外と、シンはバトル好きなのかも知れない。

「ダメダメ、あいつとやるのは俺！」

「何を」

星とシンが睨み合いを始めた。

目と目の間に火花が飛び散っている。

「やれやれ、最初は私がいくよ。」

馬鹿二人は置いて、ミントがステージに向かった。

「決まったようだ！ミント選手VSドタイトス選手！」

「はじめ！」

「冷凍ビーム！」

体が重く、動き辛いドタイトスに連続で効果抜群の技を当てれば、すぐに勝てる・・・とミントは思い込んでいた。

しかし、そうは行かない場合もあるのだ。

稀に、ドタイトスとは思えないスピードを持つ奴がいるのだ。

「電光石火！そして宿り木の種！」

冷凍ビームを避けて、ミントから体力を少しずつ奪い取っていく。

（これはまずいわね・・・早く決着をつけないと！）

「どうした？もう終わりか？ハードプラント！」

草タイプ最強の技で攻撃して、大ダメージを狙ったドタイトス。

しかし、ミントは確実に攻撃を避けていく

「甘く見てた・・・冷凍ビーム！」

ハードプラントは使用後、暫く動けなくなる。

ミントはそこを狙った。

彼女の狙い通りにヒットし、ドタイトスは倒れた。

「全く・・・だらしない。あいつのチームの奴はなかなかやるな。」

「そうね。私がいくわ。」

口調からして、メスかと思われるリーフィアがステージの上にかつて来た。

「はじめ！」

「早く、くたばりなさい！冷凍ビーム！」

冷凍ビームをフル活用するミント。

「きゃっ！でもくたばるのは貴女よ！ギガドレイン！」

冷凍ビームを受けたが、ギガドレインで、体力回復を狙うリーフィア。

「無駄！竜の波導！」

高く飛び上がり、上から攻撃により、リーフィア敗北。

今の所、チームメテオ圧勝。

が・・・

「どいつもこいつもだらしない。俺がでるしかないか・・・」

ハット推参。

これにより、ミント、シンが完敗した。

「ありやりや、俺がいくか。」

こっちは星推参。

大将同士のバトルになった。

「はじめ！」

「いくぜ！波導モード！」

星がそう言うと、体の上に金色のオーラが現れた。

星はこれを波導モードと命名したらしい。

「日本晴れ！ソーラービーム！」

星が危険だと、判断し、草タイプの大技で攻撃した。

「瓦割り！」

それを超スピードでかわし、そのスピードで勢いをつけて、ハッ

トの頭を殴った。

もちろん、超ダメージだ。

普通なら、頭蓋骨が割れる。

「くそっ、ジャングル・オブ・ハリケーン！」

星に超大技を使って、一気に倒すつもりだった。

「遊んでんのか？無限・波導流星群！」

必殺をかわされ、逆に奥義で攻撃された。

流石のハットも、これには敵わず、倒れてしまった。

「ハット選手敗北！よって優勝チームはチームメテオだ〜！！」

第一回、バトル大会を制したチームメテオには賞金50万と、トロフィーが与えられた。

決勝！星VSハット！（後書き）

星「やっと勝ったか」

よかったね。

星「これだ安心だ〜！」

お前は最初から安心してたろw

ハット「おいこら作者、何でこの俺が負けたんだ」

なんとなく。別にいいでしょ？

ハット「よくない！ぶつぶつ・・・」

ああ〜やかましい。じゃ次回もお楽しみに！

ハット「おい、無視するな！」

グレスの正体、新・波導モード!?

「あゝ暇だゝ。レンゝ次の町まで後どんくらい?」

「知らん」

第一回バトル大会・セント大会を制した翌日、一同は次の町・ムシャルシティを目指していた。

なぜなら、第二回バトル大会があるからだ。

「星、ムシャルシティまで後三時間だよ。」

星に残り時間を伝えるシン。

「マジ!? まだそんなにあんの!?!」

「うん。」

即答。しかも一言。

これにより、星のやる気は75%ダウン。

この時、ぼのぼのした雰囲気の一団を影から見つめる奴がいた。

もちろん誰も気づいていない。

「あゝあ、やる気うせたゝ」

星が言い切ったその途端！

「波導弾！」

何と何処からか波導弾が飛んできた。

「何だ！？」

「10万ボルト！！」

間一髪、ソラが打ち落とした。

すると、木陰からフードを被った男が出てきた。

「チームメテオ、我が組織・『デス』のボスからの命により、処刑する」

「デス……？お前シークの仲間か！？」

「シーク？あのクズか。仲間ではない。しもべだ。」

一応、同じ組織のメンバーだと言う事が分かった。

（こいつ、何処かで会ったような感じがする……）

「それと、星。久しぶりだな」

「誰だ？お前？」

星の勘は当たっていたらしく、二人は何処かであった事がある模

様。

「やはり、フード被ってたら分からないか……俺だよ」

その男がフードを取った時、星は愕然とした。

その男もルカリオだったのだ。

「お前……まさか!？」

「誰だ?星。」

メンバーは誰なのか分からないらしい。

ただ一人、ソラを除いては。

「何で…アンタが……」

ソラも震えている。

「誰なんだよ!?!星!?!」

「こいつの名前は銀河……俺の………兄貴だ……」

「「「!?!」」」

全員、驚きを隠せない。

何と目の前にいる敵は星の兄だと言うのだ。

「銀河？そんな奴はもういない。俺の名はグレス、『デス』の幹部だ！」

そう叫んだ後、銀河……いやグレスが殴りかかってきた。

ソラは兎も角、星は震えて攻撃が出来ない。

「インファイト！」

「サイコネシス！」

連打を仕掛けてきたグレスをミントが無理矢理止めた。

「ぐっ、ハアアアアアア！……！！！」

何と、グレスの体から、銀色のオーラが出てきた。

「こんなもの……フンッ！」

まるで、星の力の様だ。いや、基本的には同じ力かと思われる。

「ゴミクズどもが………」

グレスがボソッと、そう言った瞬間、星を除いた全員が倒れた。

「てめえ！ハアアアアアアアア！……！！！」

仲間が倒れたことで、星がキレた。

波導モードになり、グレスの方に突っ込んでいった。

だが、少し様子が変だ。

目が白目になり、普通の波導モードの10倍くらいの力が出ている。

オーラも、金色ではなく、黒色なのだ。

「こ、こいつ！？何だこの威圧感は……？」

「ギラアアアアアアア！！！」

もはや、言葉になっていない。

どう見ても、意識が吹っ飛んでいる。

「グラアアアアア！！！」

「ぐわっ！？」

大声で叫んだ後、思いっきりグレスを投げ飛ばした。

「ぼ、暴走してやがる……何なんだ、一体！？」

「ギラアアアアア！！！」

星はそう叫ぶと、グレスに突っ込んでいった。

グレスの正体 新・波導モード！？（後書き）

星「何だよ！？限が悪いぞ！」

まあ、良いんだって（笑）

ソラ「（笑）で何でも済むと思うなよ！」

何か、やばいな……

逃げ！

星「都合が悪くなると絶対逃げるよなあいつ」

ソラ「まあ、いいや。次回もお楽しみに！」

星の大災難

あたりは、荒れた土地しかなく、草ひとつない。

その土地に、ルカリオ、レントラー、バシャーモ、ラティース、ラティオスが倒れていた。

全員、生きていようだが、全然動かない。

その時、一匹のルカリオが起きた。星だ。

「あいたたたたた……何処だ？ここ」

そう言いながら、起きてきた時、レントラーが起きた。

言わなくても分かるだろうが、ソラだ。

残った三匹のポケモンも言わなくても分かるだろう。

「……………星？大丈夫か？」

「……………？」

なにやら、ソラの方を見て、頭を捻っている。

「どうした？星？」

そう質問したソラ。

だが、次の星の一言で、ソラは一生で、最も驚く事になる。

「お前……………誰？」

まさかのまさか。

とんでもない事態に陥った。

「誰って……………ソラだよ」

「それが誰だって聞いてんだよ。誰なんだよ、お前。」

記憶喪失……………？

まさか、そんな事はないだろう……………。

その時、ソラは気付いた。

銀河……………いや、GRESが消えている。

その時、レン達起きた。

「いつてゝ、あれ？星大丈夫だったのか？」

シンが星に聞いた。だが、やはり驚く事になる。

「お前も……………誰？」

「「「！？」」「」」

驚かない方が、可笑しい。

ホントに記憶喪失？

「シンだよ、シン！分からない？」

「全員誰だよ？お前達なんて知らないぞ」

「「「「.....こいつ本当に、記憶喪失！？」」」」」

四人の叫び声は、遠くの町まで届いたと言う。

それにしても一体何が起こったのか？

それは、続きを見てくれ。

「三時間ほど前」

「グギヤアアアアア！！！」

黒いオーラに包まれ、意識を失った星。

その星が、グレスに殴りかかった。

「くっ、この野郎！波導弾！」

星の攻撃を全て避け、至近距離でカウンターの波導弾を使ったグレス。

流石に、それ以上に追撃が出来なかった。

腹を押さえ、苦しそうにしていた。

「ハア……ハア……グッ！」

グレスもかなりのダメージを受けているらしく、しゃがみこんだ。

「グギヤアアアアア！！！」

ダメージを与えられたことに腹が立ったのか、手から巨大な黒い

波導弾が出てきた。

「あ、あれを食らったらやばい……………逃げないと……………」

そう言いながら、逃げようとしたグレス。

「グラアアアア！……！」

しかし、逃がそうとしないのが星だ。

今の星は暴走している。

優しい心は完全に無くなっているのだ。

叫んだと同時に、黒い波導弾を飛ばした。

「しまった……………」

そう言っ、絶望した時、ある影がグレスを救った。

その後、そのポケモンは星のオーラを押さえ込み、何やら呪文のようなものを唱えて、グレスとその場を離れた。

オーラを押さえられた星は、そのまま倒れた。

そして、今に至ると言う訳だ。

「と、とりあえずムシャルシティに行こう。話はそれからだ」

仕方なく、全員は大怪我のまま、町へ行った

星の大災難（後書き）

まさかの記憶喪失w

ソラ「確かに……………」

星「なあ、ここ何処？お前ら誰？」

もういいよ君。

家帰って休んでなさい。

では、感想待ってます！

蘇った記憶、最強の必殺！

「なあ〜何処行くんだよ？俺お前らの事冗談抜きで知らないって。」

「俺らはお前知ってるからいいの！」

変わったやり取りだ。

滅多に見れるものではない……………はず。

因みに、メンバーはムシャルシティ目指して移動中。

結構遠いのだ。

「あゝあ暇だ〜」

記憶はなくしても、性格は変わらないようだ。

相変わらず、呑気な奴である。

「……………シン、ミント、催眠術頼む。こいつ五月蠅いから。」

「「ラジャー！催眠……………」」

「待ちやがれっ！」

二人が催眠術を掛けようとしたその時、草むらから30…………いや40を超えるポケモンがメンバーを囲んだ。

元々、道は狭いため、逃げように逃げられない。

「此処は俺らの道だ。通るなら金をよこせ!」

(あゝあ、メンドいなあ……………こんな時、このバトル馬鹿が闘えたら……………ん?待てよ……………闘えない訳ではない……………よし!)

ソラが何か思いついたようである。

「なあ、星。お前も闘ってくれ。」

どうやら、全部星に片付けさせるようだ。

が、次の一言で前回に続き、とんでもなく驚く事になる。

その一言とは……………

「俺、闘い方知らない。」

「『『『『どえ』え』え』く！！！！』』』』」

記憶喪失がここまで強いとは……………

まさか、一番好きなことまで忘れさせるとは……………

「ケケケ、お荷物が出来たな。よし、仲間全員つれて来い。こいつら金持ってそうだからな。」

リーダーっぽいボーマンダが言う。

「くっそ、役にたたねー！シン、ミント、レン、全力だー！雷！」

「ラスターパージ！」

「ミストボール！」

「オーバーヒート！」

四人とも、最強の技を使った。

しかし、敵は減るところか、どんどん増える。

敵の仲間は多すぎるのだ。

「おい、そのボーマンダ！てめえらどんだけ仲間いるんだ！？」

「そうだな…… 3000人くらいはいるな。」

脅威の数。倒しても倒しても減らない訳だ。

しかも、こっちは僅かに五匹。

一匹は闘えない。

このバトルは真夜中まで続いた。

「ぜえ……ぜえ……」

「ハハハハ、もうくたばったらどうだ？ 楽になるぞ！」

降伏勧告が来た。

普通ならそろそろ諦めるだろう。

「皆、もういい。金渡して行こう。」

星が諦めてしまった。

どうやら記憶がない星はただの意気地なしらしい。

「断る！ 皆、やるぞ！」

レンが皆を励ましたが、もうそんな気力はなかった。

「馬鹿な奴らだ………殺^やれ。」

ボーマンダが指示を下すと、敵は全員攻撃してきた。

「うわああああ！ 星、逃げろ！」

「全滅は免れればいいのよ！ 逃げて！」

「逃げてくれ！ 僕達はいいいから！」

「とつと失せやがれ！早く行け！」

全員が星に逃げると言うのだ。

その時、星は頭を抱えて蹲すくまった

「頭が……ハアアア！ハア……ハア……皆、もついい。」

「何言つてやがる！手を止める全滅だ！」

そう、正に絶体絶命。

攻撃を止めれば、命がなくなるのだ。

「いいから止める。」

「逃げられねえんだよ！どうするんだ！」

「そうじゃねえよ……」

星が何を伝えたいのか、みんな分からないようだ。

「俺が言いたいのは……ここからは、俺がやる！」

そう叫ぶと、星は波導弾を連続で打ち出した。

しかも、当たると爆発するのだ。

「爆発波導弾だ。そして、暗黒・波導モード！」

すると、体から黒いオーラが出てきた。

しかし、星は余裕顔で笑っていた。

「全員失せやがれ！暗黒奥義・無間！」

意識を保った状態だ。

手を胸の前に構えると、手からドス黒いオーラが出た。

それが、丸い塊になり、どんどん大きくなっていく。

「なっ、何だこれは！？」

レンまで、驚いている。

「あの世へ旅立て……………」

星が小声でそう言うと、黒い塊は敵を包んだ。

その後、すぐに塊は消えたが、敵は全員倒れていた。

「星、お前……………」

「迷惑掛けたな、記憶は戻ったぜ！」

「やっただー！！！」

ミントがそう叫ぶと、全員がはしゃぎ出した。

そして、暫く歩くと、巨大な町が見えた。

ムシャルシティだ。

全員は、真夜中なのにも関わらず、そのまま寝ないで遊びまわった。

蘇った記憶、最強の必殺！（後書き）

星「いやゝ、記憶戻ったよ」

ソラ「にしても、記憶もどすの早すぎない？」

いや、あのままだったら続きが思い浮かばなかったから。

後、必殺技の説明を

暗黒奥義・無間とは……………

無理矢理、敵を眠らせて、記憶を破壊。その後には脳の働きを無理矢理停止させ、神経を破壊。さらに筋肉を破壊、骨を粉碎、細胞を崩壊させて、最後に内臓破裂させる残酷極まりない技。

星「怖えゝ」

ソラ「やば過ぎwww」

ハハハ（汗）

謎の竜・天登場、命を狙われた星

まだ、午前五時なのだが、町は妙にざわついている。

なぜなら、ムシヤルシティは今日、バトル大会があるのだ。

だが、バトル大会に出るとは言え、基本的に強い奴はいない。

それなのに何でざわついているのか？

答えは簡単、強い奴が出てくるのだ。

しばらくすると、一台のリムジンが会場の前に止まった。

そこから、一体のカイリユーが降りてきた。

「おお、前回全国大会優勝チーム・ゴツトのリーダーの天^{てん}だ！」

ランニングしてる、元気の良いじっちゃんのゴウカザルが驚いている。

そう、彼はチームゴツトと言うチームの隊長だ。

伝説のポケモンを超えた唯一のポケモンと言われている。

この時、チームメテオは……

「むにゃむにゃ……………もう食べられねえよ……………」

「ぐ〜ぐ〜」

「すーすー」

「……………（何も音が出てない）」

「ぐがぁ……………ぐがぁ」

全員爆睡状態。

上から順に、星 ソラ シン ミント レンである。

特に、星は内容が想像できる、漫画とかでよくある寝言を言っている。

そして最後のはレン。お前はオヤジかっ！というツッコミは止めて下さいね〜 byカシスオレンジ

まだ五時なのだが、こいつらは十時になっても起きない気がする。

何でかって？そいつは前回の最後のあたりをよく読めば分かります。

く七時間後く

くくくくくすくすくくく

爆睡。正午だよ！全員起床！（笑）

それから五分後、ミントとレンが起きた。

しかし、何かをもめている。

どうやら、どっちが先にトイレに行くかという事らしい。

器がちつちえwww

「だゝ、五月蠅えぞ！朝から何なんだ！」

「そうだ、バツキャロー！ザッケンナ、バツキャロー！」

「グウ……グウ……」

えゝ、順に突っ込んでいきます。

その壱 星、もう正午。決して朝ではない。

その弐 シン、若干キャラ崩壊

その参 起きろおおおお！せめて起きろおおおお！空
気読めえ！

「五月蠅いです！ほかの方に迷惑です！」

院長のラッキーに怒られましたゝ

まあ、それで全員落ち着いたけど。

十分後

「おい、準備OK?」

全員荷物をまとめて、部屋を出た。

どうやら、バトル大会会場に向かうらしい。

「よし、行くぞ。」

しばらくすると、目的地の会場に着いた。

その受付口である事を告げられた。

「本大会は、チームから一人だけ出場できます。」

「「「「マアアジイでえええ!?!」」」」」

出場できるのは一人のみ。

四人は、バトル出来ないかもしれないと事で、驚いているが、ソラは喜びの驚きだった。

「じゃあ、この中で一番強い奴に参加させようぜ。なっ、星。」

一番強いのは、星だ。

ソラは星に参加させるつもりなのだ。

「うん、そうだね。」

「強いって言ったら星だからね。」

「それしかないな。」

「iiiiiiよっしゃー!!」

全員それで良いらしい。

と言うわけで、星の参加が決定！

しかし、それを、遠くから見てる影が……

「控え室」

「はい、奴はいました」

暗い控え室に、電話をしている影があった。

『うむ、奴を……消せ』

「承知」

電話から、何者かを消す命令が出た。

影は、電話を切ると、立ち上がった。

「フフフ……お前の命日は今日だ……………星……………フフフ、
フハハハハハハ！」

そう笑って、控え室を出たのは、一匹の竜だった……………

謎の竜・天登場、命を狙われた星（後書き）

星

「ぎゃあああああ！！やべええ！！」

どうした？

星

「誰かに命狙われてんじゃない、俺ええええ！！」

そりゃ良かったね、君のご先祖様に会えるね（笑）

星

「酷っ！？」

あらま、のの字で落ち込んだじゃったw

じゃ、ソラ、シン、次回予告みたいのヨロシク。

ソラ

「分かった」。遂に始まった第二回バトル大会」

シン

「星は優勝できるのか！？」

ソラ

「そして、大会に現れた謎の影は！？」

シン

「次回もお楽しみに！」

雑魚ばかりの大会（前書き）

すいません、今回ぐだぐだです。

星

「おい（汗）」

ま、まあ、とりあえずどうぞ！（汗）

雑魚ばかりの大会

ムシヤルシティのバトル大会が始まり、いよいよ強い奴が出てくるのか〜という雰囲気がある。だが実際は…………

「波導弾」

「ホギヤアアアア!!」

雑魚だらけである。

まだ始まってから一時間しか経ってないのに、星の準決勝進出が決定したのだ。

勝負が終わり、控え室に戻る星に、何故かカメラと、マイクも持ったポケモンが来た。

「ここで、準決勝を迎える星さんにインタビューしたいと思います
！」

何と、インタビューだったのだ。

しかし星は…………

「インタビューって何？美味しいの？」

お前は何処まで馬鹿なのか…………？

と、自分でも突っ込んでしまった。

そこで、インタビューは何なのかと言う事説明するだけで、十分掛かったと言うのは、また別の話。

「えー、この大会について、どう思いますか？」

「……………はつきり言って、つまんね」

それを言うなよと言う突っ込みは止めてくださいねー

「俺は強い奴と戦いたかったのに……………」

「そ、それは残念でしたね……………」

記者が微妙に苦笑いしている。

「では、次行きましょう！Let's go！」

さっさと離れた。

このバトル馬鹿が語り始めると、長くなりそうだったからだ。

そして、あるカイリユーの所へ行つた……………。

「では、たった今、準決勝を制し、決勝進出した天さんにインタビューしたいと思います！この大会は……………」

「黙れ。俺に構うな」

何故か冷酷な態度を見せる天。

「あ、あの………」

「十秒待ってやる。今すぐ俺の視界から消えろ。消えなければ……
殺^やる」

どこかが怖すぎる奴だ。

頼むから、もう少し優しくなさい。

「わ、分かりました………ほら、行くよ！」

流石に怖気づいたらしく、またさっさと逃げてしまった。

その後、

「準決勝が始まります。星選手、ステージに来てください」

というアナウンスが流れた。

これを聞いた星は……

「ギャアアアア……！忘れてた……！早く行かないと……！」

『ザワザワ……』

何故ざわついているかいうと、星の遅刻である。

ソラ達も、観客として見ていたが星の遅刻には呆れていた。

「アチャー、あいつこんな大事な時も遅刻か……」

「いい加減、遅刻癖直すべきだね。」

「私をそう思う。」

「ぐっ…ぐっ…」

上から順に、レン、シン、ミント、ソラで喋っていた。

いや、一匹は寝てるだけだ。

まだ寝たりないのか、己は。

「わりいゝ、待ったゝ？」

走って裏から星が出てきた。

「おっそ〜い!!!」

ミントがキレた。

今にも飛び出しそうの感じた。

「わりいわりい、今からやっか!」

と、まあバトルが始まったのだが……

「えいつ、ドレインパンチ!」

「あびょ〜ん!!」

敵は雑魚なのだ。

「あ〜暇だ〜もつと強い奴はいね〜か〜!」

もついい、それ飽きた。

「強いか……俺はどうだ?」

だるそうにしている星の後ろに、カイリユーの天が現れた。

「少しは出来る見たいだな……波導弾!」

「フン」

星は不意打ちを放ったのだが、完璧にかわされてしまった。

「俺の不意打ちを避けるとは…………やるじゃねーか、お前！」

「あゝ、お取り込み中の所すみませんが、選手も揃ったので、決勝開始してもいいですか？」

完全に二人の世界を打ち破り、審判が出てきた。

「ってことは、俺の相手はこいつか……………」

「そういうことだ。」

遂に、決勝戦が始まる……………

雑魚ばかりの大会（後書き）

天

「何というぐだぐだっぶりだ……」

なんで君が……

天

「星という奴に、貴様を処刑してこいといわれた」

ちよっ、何で!?

天

「問答無用!」

うわあああああ!!!!

2009年9月9日 作者ここに眠る

天の正体、グレス再び！

「波導弾！」

「ドラゴンクロー」

現在、決勝戦で、星と天が戦っている。

だが……

「インファイト！」

「守る、高速移動、剣の舞、ドラゴンクロー」

「ぐわっ！！」

こんな感じの攻防が続いている。

「くっそ、こうなったら、未完成のあれやるか………冷凍パンチ！」

「何っ！？」

圧倒的に不利ではあったものの、相手に効果絶大の技で何とか戦っていたのだ。

だが、それも長くは持たなかった。

「れいと……」

「竜の息吹！」

攻撃を出す前に、攻撃を食らえば、出そうとした攻撃は強制終了される。

「くそっ！」

「そろそろ終わりにしてやる。竜星群！」

遂に、超大技が出た。

オリジナル技やオーラを出す暇もなく、やられた。

「ストップ！この闘い……」

「竜の舞、竜の息吹、竜の波導、ドラゴンクロー」

審判が止めようとしたのだが、なぜか天はそのまま攻撃を続ける。

そして、彼は驚くべき言葉を口にする。

「星……………貴様には……………死んでもらう必要がある。」

「何っ！？どついう事だ！？」

審判も驚く。

当然、星を驚いていた。

また、いつのまにか、多くの警察が、ステージの周りを囲んでいた。

「てめえ、何者だ!？」

どうにか天の猛攻から脱出できた星。

しかし、星の求めた答えは、天の口からではなく、控え室からした声が答えた。

「そいつは、『デス』の幹部だ。」

ある影が、控え室から出てきた。

その影とは……？

「銀河………」

「よう、星。いや、俺の弟よ。」

そう、銀河……つまりGRESだったのだ。

「あいつ!生きてやがったのか!」

ソラも、観客席で叫んだ。

「お前は、我々の野望を邪魔する可能性がある。そこで、ボスからの命令だ。お前を消すと言う命令さ。」

GRESが冷静に語る。

どうやら、星は『デス』では、ブラックリストの一員らしい。

「お前らの目的は何だ！」

星が叫ぶ。

「お前に説明する必要はない……が、どうせ死ぬんだ。冥土の土産に教えてやる。我々の目的は………」

会場の全員がゴクリと、唾を飲む。

「我々の目的は………世界征服だ。」

『！？』

この一言に会場の全員が驚いた。

「いや、言い方が悪いな……正確には、乱れたこの世界を破壊し、新たな、正しい世界を創ることだ。ボスは優しいお方さ。苦しい奴を、助ける為にこの組織を立てた。」

GRESが延々と語っていく。

全員がその話を黙って聞いていた。

「なら、何でてめえらは殺戮を行う？」

いつの間にか、ソラ達もステージに降りてきた。

「大きな目的を果たす為だ………多少の犠牲は仕方がない。いや、元々我らに反対し、目的を邪魔するクズどもなんか死んで当然だ。

所詮、この世界のゴミだからな。ただの掃除だ。何も悪くはない。」

グレスのこの一言に、星がキレた。

「ふざけんじゃねえ！同じポケモンを殺して正解だと言うのか！同じ仲間だぞ！その仲間を殺したお前らこそ、本当のクズだ！」

星の一言に反応したのは天だった。

「ほざけ。貴様らこそ、その仲間を差別、軽蔑、虐め、乱暴を繰り返した。それこそが、悪と言えるだろう。ボスが創る新世界に、悪は必要ない。だから、今の内に消しておくのだ。勿論、お前達もその対象だ。もし、文句があるなら……………」

「口論じゃなく、無理矢理にでも分からせるって事か……………」

レンが何を言いたいのかに、気づいた。

「その通りだ。口で言っても分からない馬鹿には、体で教えるしかない。」

「上等だ。そっちが悪だって教えてやるよ。」

星も、戦うつもりだ。

ソラ達も、目が怒りで燃えている。

「来い……………」

今、悪と正義を判明させる闘いが始まる。

天の正体、グレス再び！（後書き）

星

「無駄にシリアスな展開が来た（汗）」

ハハハ（汗）

ソラ

「新世界って……デスートか（汗）」

まあ、いいんだって（笑）

あと、次回予告ヨロ。

星

「自分達を正義とし、新世界を創ろうとする『デス』」

ソラ

「しかしその為には多くの犠牲が必要であるのにも関わらず、それを実行しようとする。」

星

「果たして、どっちが正しいのか？」

ソラ

「悪と正義を決める闘いが、今始まる……………」

理由

「波導弾！」

「見切り！」

今、バトル大会会場で、メテオと『デス』が戦っている。

「下がって、星！兄さん、あれやるよ！」

「分かった！」

現在の戦いの組み合わせはこうなってる。

グレスVS星&ラティ兄妹

天VSソラ&レン

「ドラゴン・ショット！」

二人で大きな竜の波導を放った。

「無駄だ！ブレイク・キャノン！」

グレスも負けじと、砲撃を放つ。

二つの技は相殺し、大爆発を起こした。

「うっ！」

「きゃっ！」

大爆発で、ミントとシンが吹っ飛んだ。

星にも被害は出たようだ。

「くそっ、二人とも大丈夫か!？」

「僕は大丈夫だけど、ミントが……」

ミントは体中に傷を受け、気絶していた。

シンも、大丈夫と言ったものの、羽の一部から、おびただ夥しい量の血が流れていた。

勿論、戦える状態ではない。

つまり、この状況、一対一だ。

「俺がやるしか……波導モード！」

特殊能力を出した星。

しかし、GRESは笑っていた。

「ククク、星。その力はあまり使わないほうがいいぜ?」

突然、意味不明な事を言い出すGRES。

「どういうことだ？」

「ククク、教えてやるよ……その力、一見、莫大な力を出せると思えるだろう……だが、その力は、使えば使うほど自分の何かを失う。つまり諸刃の剣ってことだ」

「何っ!？」

そう、何の代償もなく、万物を超えるなど有り得ない。

何かを手に入れば何かを失う。

星の力は、力の代償に、自らを滅ぼす　つまり、己の体を滅ぼすと言う力だ。

「そして、その力を使えるのは、お前だけじゃない。俺らは兄弟なんだぜ？俺も同じ戦闘民族の血を受け継いでいる……何が言いたいのか分かるか？」

「お前も……この力を……」

星が言い切った瞬間、グレスの体から青色のオーラが現れた。

「俺の力の代償……それは悪の心だ。そして、俺はもうずっと前から使い続けている。つまり、俺の中にはもう正義しかない。」

ここで、引つかかった人もいるだろう。

そう、グレスは「自分の中は正義」といったのだ。

「正義……？ふざけんな！お前には、悪しかない！失われたのは正義だ！」

「ああ」

何と、GRESはその一言に反論せず、認めたのだ。

「昔はな。だが、今、俺がやっている事は俺にとっては正義……そしてお前達は悪だ」

「……………昔のお前はそんな奴じゃなかった。昔のお前は優しい俺の兄だった。何があったんだ、一体？」

「知ったのさ。この呪われた一族のことを……………」

突然、悲しい目で下をむいたGRES。

少し、悲しそうな目をしている。

「呪われた一族？なんのことだ？」

「俺らの力が昔の戦闘民族の力だと言うことは知っているだろう。その一族は己の力の為に、仲間、友達、家族、同族の者達を……殺した。そして、何やら特別な力でその殺した奴の力を奪った。勿論、その一族はどんどん減って行った。だが、実際、そのろくでもない奴はまだいる。こんな奴らは悪だ。俺はその事を知り、打とうと思ったのさ。この下らない一族の歴史に終止符を……………」

GRESは虚ろな目で語っていく。

星も、聞き入っていた。

「だが、いくら俺でも一人では無理がある。そこに現れたのはあのお方だ。あのお方は、『私が力を貸そう』と言ってくれた。どうせあの民族には悪しくない。そのうち、全員殺せるだろう。だから俺は『デス』に入った。元々は、一族全員を殺したら組織を抜け、隠居をするつもりだった…が。」

急に、グレスはいつも通り、強気で鋭い目つきに戻った。

「俺は、組織にいる内に、ボスの考えに共感し、その目的の為なら、手駒だろうが奴隷だろうが何だろうが構わない。俺は一生懸命働いた。そして、銀河ではない……グレスと言う名を頂いた！もう、『銀河』は死んだ！俺はグレスだ！『デス』の一員だ！そして、お前らは我々の邪魔をする……ならば、削除だ！碎け散れ！」

言い切った瞬間、グレスは飛び掛ってきた。

寂しそうな雰囲気は一転、血も涙もない、ただの殺し合いが始まった。

「畜生が！ヘル・インファイト！」

「無駄だ！究極奥義！カオス・ブレード！」

兄弟の戦いは、悲しい物だ。

また、二人の戦いは、レベルが高く、ソラ達は固唾を吞んで見守るしかなかった。

「竜の波導！」

「こっちも竜の波導！」

入り込む隙間もない戦いが繰り広げれる中、たった一つの声が、会場に響いた。

「そこまでだ！」

見上げると、一匹のルカリオが壁の上に立っていた。

「ま、まさか……」

「アンタは……」

「久しぶりだな、お前達。」

「
「
……
親父
」
」

理由（後書き）

やべえ W W W 最新作超楽しい W W W

星

「それで更新が遅く？」

うん…って何？その殺気に満ちた顔。怖いんだけど……

星

「いや？ただ、殺してやろうかな？」

ええ？

星

「まあ、とつとと死ね」

わあああああ！！

裏切り（前書き）

あゝ、どもっす！

因みに、今回すんごいことがあります！

ソラ

「けっ、どうせどーでもいい話だろ？」

呑気だなぁ自分が死ぬかも知れないのに……

ソラ

「は？」

ではどうぞ！

裏切り

「「……親父」」

そう、彗星のごとく現れたのは二人の父親だった。

「フツ、大きくなったな。星」

「……」

喋り方などは穏やかだったが、星には巨大な殺気を出していることが分かった。

「銀河、組織のことを話しすぎだ。こいつらにそこまで言う必要はない。」

「俺はグレスだ。銀河はもう死んだ」

「……どう言うことだ、親父」

殺気とグレスとの会話の内容、どう考えても怪しすぎる。

「相変わらずトロいな。誰に似たんだか……」

意味ありげなことを次々と言い出す父。

そして、驚きの一言を放つことになる。

「俺は天やグレスと同じ……………『デス』の幹部だ。」

「やっぱりか……………」

何と、父まで組織のメンバーだったのだ。

しかも、グレスと二人で組み、星と戦えば、星は確実に負ける。

ミントとシンは動ける体ではない。

最悪な状況である。

更に……………

「終わりだ……………竜星群」

隣で大きな爆発音が聞こえた。

音が止み、煙も晴れると、二体のポケモンが血まみれになって倒

れていた。

言うまでもなく、ソラとレンだ。

「そんな……………」

星の目の前は真っ白になった。

絶望した星に、更に絶望を与える一言が父親から放たれた。

「シン、ミント。星を片付けろ」

「「はい、恒星様」」

まさかの裏切り。

その瞬間、ミントとシンは何処からか、ナイフを取り出した。

星に向かって歩き出した。

その瞬間！

「うわあああああああ！！！！！！」

突然、大声で叫びだした星。

目からは涙が流れていたが、その涙はすぐに止まり、さっきとは打って変わっての鋭い、迷いが微塵にも感じられない目つきに変わった。

「ククク……ククククク……やっとな分かったぜ……」

不気味な笑顔を浮かべる星。

また、同時に有り得ないほどの殺気が生まれていた。

「もう誰も信用なんかしない。いや、信用などできない！信用すれば、悲しみ、後悔を生む……今、ここで！俺はお前らとの繋がりを切る！俺はこれから、俺の為だけに戦う！」

星の体から、黒いオーラが現れた。

しかし、透明な部分は全くなく、星を包んで行く……

「地獄で泣き叫ぶがいい……俺を裏切ったことを……命をもって償うがいい……暗黒奥義……無間！」

「くっ！？グレス、ミント、シン、天！逃げるぞ！」

父・恒星は逃げようとした。

だが、星は追うどころか、黙って見ていた。

更に、不敵な笑みを浮かべ、無間を構えていた。

「俺から逃げられると思うな……滅べ……」

そう呟いたあと、無間が会場を包んだ……

裏切り（後書き）

どうも

星

「俺キャラが変わってる……」

ほっとけ。後、今人気投票あるんでよかったら見てってください！

ミュウ推参！

「ククク……」

会場には特に変化はなかったものの、会場にいたポケモンは全員倒れていた。

「死んだか……さて、『デス』のボスとやらでも殺してやる。この世は……俺が消す」

さりげなく恐ろしい一言を呟いた後、星はその場を去った。

それから約三分後に、玉の様な光が会場に現れた。

「今の彼は闇に取り付かれている……早く止めなければ大変な事になる！まずはこの人達を……」

その光は、そう言った後、巨大な光を作り出して会場をまた包んだ。

「我が光よ！死する者に、再び命を！」

すると、会場のポケモン達が次々と起き上がっていくではないか。

「うつうつ……くっ！ここは……」

恒星（父親）が起きた。

「む、星がない……？ん？何だあの光は……」

恒星は、光の玉に近づいていく。

すると、光が少しずつ消え、中から一匹のポケモンが現れた。

また、そのポケモンが現れたと同時に、全ての者が目を覚ました。

「いててて……！てめえら！」

ソラは起き上がった途端、戦闘態勢に入った。

レンも同じく構える。

逆に、シンやミントは恒星の元に走った。

天はソラ達を睨み付けている。

「くっ、来い！」

恒星は、そう言ったはいいが、もはや体力が残っていなかった。

しかも、そこに

「恒星！」

「死んで！」

何と、シンとミントが攻撃を仕掛けた。

「ぐわあああああ！！」

予想外の不意打ちに、恒星は倒れてしまった。

グレスも、その状況が信じられず、シンとミントはそのまま、ソラ達のほうへ戻っていく。

「き、貴様ら！俺らの方に寝返ったんじゃないのか！」

グレスも驚き、二人に対して聞いた。

しかし、答えたのはソラだった。

「残念だったな。全部俺の作戦だ。あの天の奴が『デス』のメンバーだってことぐらい、気づいてたぜ」

寝返りは嘘だったのだ。

「そして、俺はお前らの気配にも気づき、お前らがいない所で星以外のメンバーに伝えた。星が本当の裏切りだと思わせ、その怒りで力を引き出したのさ。俺らが天に負けたのも、作戦だ。だが、少しやりすぎた……」

「そうです。今の星さんは闇にとりつかれています。」

ソラが作戦を全て暴露した後、光のポケモンが言った。

恒星を除いた全員が、その姿に気づいた。

「私はミュウ。光の使者です」

何と、その正体は幻のポケモン・ミュウだったのだ。

「今は争う時ではありません。早く星さんを止めないと、この世界は壊れてしまいます！」

『何だつて！？』

ミュウはそう言ったが、恒星は納得しなかった。

「なぜ、奴のせいでこの世が壊れると？」

「恒星さん。貴方の一族の特別な力には三段階あります。第一段階はグレスさんのように、力を使い、何かを失うと言う効果があります。ですが、第二段階になるとその程度では済みません。」

この言葉は、誰もが理解できなかった。

「第二段階の最初の状態は暴走状態に陥ります。黒いオーラを身に纏い、視界に入る物全てを破壊しようとしています。ですが、それを押さえ込めば、逆に何も失わず、第一段階よりも大きな力を得る事が出来ます。それで終わりならいいですが、最も恐ろしいのは第三段階です……」

ミュウの声も少し震えていた。

「第三段階は、普通ではなれません。いや、なるはずがありません。第三段階は自分の中で起こった怒りや悲しみなどの負の感情によって起こります。それも、とても小さいものではない。巨大なものがないと、有り得ないのです。なってしまうえば自分の中の全ての感情は怒りに変換され、無差別にポケモンを殺そうとします。また、手

に入れた力は第二段階の百倍近くあります。」

誰もが、その恐ろしさが分かったらしい。

しかし、それだけではないのだ。

感情だけならば、負の感情がたまれば、発動できる。

ならば、なぜ、星しかできなかったのか。

「そして、もう一つ。例えば負の感情が溜まっても、喜びや幸せなどの正の感情によって、なくなります。第三段階の引き金はもう一つあります。それは……」

心の闇です。」

どういうことか？

と、会場の全員が思った。

「心の闇……それによって第三段階は発動されます。なぜかと言うと、その力自体、闇の力なのです！」

星の一族は闇の一族なのだ。

「呪われた一族に伝わる闇の力……その力は世界を破壊する為に創られた物です！」

ミュウ推参！（後書き）

人気投票中！詳しくは『星の大冒険・裏話』まで！

星を止める

ある森を星が走っていた。

「全てをなくしてやる……………ククク……………」

恐ろしいことを言いながら、星はどんどん走っていく。

だが、恐らく当てもなく走っているだけだ。

一方、ミュウ達は……………

〈会場〉

「皆さん、早く星さんを止めないといけません！」

「止めるって言ったって……どうすんだ？」

「それは星さんを追いながら話したいと思います。ついてきてください！」

そういって、ミユウは走り出した。

ソラ達もついていく。

ある程度走り、森まで来たら、ミュウは説明を始めた。

「星さんは今、とてつもない量の闇の力に支配されています。ですが、私の光の力ならば闇を照らし、消し去ることが出来ます。但し、それには一つだけ条件があります。」

「何だ、その条件は？」

ソラが尋ねた。

ミュウはまた説明を始める。

「それは……波導モードの封印です」

「何っ!？」

レンが立ち止まった。

ミュウ達も止まった。

「何故、そんなことを？」

冷静に尋ねるレン。

ミュウも、冷静に説明する。

「先程も言いましたが、あの一族の力は闇です。波導モードを使用し続ければ、またいつかこの様な状態に陥ります。」

それならば、納得が行くと、皆も思った。

「ですが、いつかまた波導モードを使用できる日は来ます。その時は、闇ではない、光の力となります。」

この一言で、メテオはかなり喜んだ。

ミュウも微笑む。

だが、『デス』は……

「悪いが、私達には関係がない。だから、協力する必要もない。我らは星を殺す。それが我らの任務だ。」

そういうと、恒星、グレス、天は何処かに行ってしまった。

「……！危ないっ！」

木の上から、波導弾が飛んできた。

ミュウは、念力を使い、ソラ達を助けた。

「この波導弾は………」

「よう、クズ共」

星だった。

どうやら、森を抜けようとしていた時、ミュウ達に気づいたよう

だ。

「星！俺だ！ソラだ！」

ソラは大声で星に呼びかける。

だが、星から帰ってきた返事は、喜ばしい物ではなかった。

「失せる」

波導弾を放ってきた。

「く、電撃波！」

ソラはそれを相殺する。

「……死ね」

相殺した時の煙から、もう一つの波導弾が飛んできた。

「うわああああああー！」

「ソラ！火炎放射！」

レンは星に攻撃する。

だが、星はそれを難なく避け、木から飛び降りた。

そして、そのままレンの方へ行く。

「サイコキネシス！」

「ドラゴン・ショット！！！！」

ミュウとシン&ミントは星に攻撃する。

「フン」

だが、その攻撃はまた難なくかわされてしまった。

「そんな……………」

ミュウは絶望した。

「私の計算では、此処まで力を発揮出来なかった筈…………何故…………？」

「てめえの計算何か知らねえな。俺の力に負けたただけだ。」

何と、星の実力は、ミュウの想像を遥かに超えていたようだ。

「電磁波！」

後ろから電磁波が飛んできた。

ソラだ。

「てめえ…………このクソ野郎！」

星がキレて、ソラに殴りかかろうとした。

「！今です！」

ミュウが叫んだ途端、シン、ミント、レンが星を捕まえた。

「クソッ！」

星もマズいと悟ったらしく、強引に逃げようとする。

「ミストボール！」

それを止めようとして、ミントがミストボールを撃つ。

それを食い、流石の星も気絶した。

「ハア……ハア……うっ！？」

ミントは力を使いすぎたらしく、倒れた。

「ミント！大丈夫！？」

ミントを支えに走ったシン。

「う、うん………ちょっと休憩すれば………」

どうやら、平気のようだ。

ミュウは星の元に歩き、光を構えた。

「我が光よ！この者に宿る闇を消せ！」

光は星を包んで行き、黒いオーラは無くなった。

「これで大丈夫です。私はこれで役目を終えたので、帰ります。では……………」

ミュウはそれだけ言うと、消えた。

「ハア…………ハア…………何とか、終わったな」

ソラは喜びの表情になった。

皆も、喜びの表情になる。

それから、ソラは星を背負い、ムシャルシティに戻った。

星を止める（後書き）

星

「何とか戻ったな」

だね。

ソラ

「はあゝ疲れたゝ後で覚えてろよ？」

レン

「たっぷり可愛がってやるよ。」

シン

「フフフ……」

ミント

「地獄はこれからだよ？」

あらま（汗）

これ以上此処にしていると面倒なことになるな（汗）

退散！

星

「うわあああああ……！」

新たな仲間！恋する乙女&悪魔幼児！

くムシャルシティ ポケモンセンターく

「……………うゝん」

ポケモンセンターのベッドで寝ているのは星。

そろそろ目が覚めたようだ。

「……………あれ？俺は今まで何やってたんだっけ？てか、此处何処だ？」

自分が暴走していた事は完全に記憶にないようだ。

「うゝん……………ま、いつか！さゝトイレトイレっ！」

思い出すのが面倒になったのか、ベッドから降りるとトイレへ直行した。

「ふゝスッキリしたゝ」

トイレは廊下にある為、星は外に出てトイレに行き、部屋に戻るうとした。

だが、ポケモンセンターのいロビーの方から泣き声がした。

「えん！えん！」

「どうかしたのかな？行ってみようっ！」

星は部屋に戻らず、そのままロビーに向かった。

ロビーで泣いていたのはどう見ても幼稚園児のプラスルとマイナ
ンだった。

「えん！」

「どうかした？」

星は一人を見つけると、何故泣いているかを尋ねた。

「えーん！爆弾の袋無くしちゃったよ」

「僕はナイフのセットを無くしちゃったよ」

「そうかそうかって……どええええええええええ！！！」
「！！？？？？」

落し物は有り得ない物だった。

「そ、それって玩具だよな？」

信じられない、いや本物だとは信じたくない星はもう一度尋ねた。

だが……

「本物に決まってるじゃん！」

「本物じゃなきゃ面白くないもん！」

返ってきた返事は有り得ない物だった。

「や、ヤバいぞ…………こいつらはヤバい（汗）」

思わず後ずさりしながら逃げようとした時、入り口から一匹のサーナイトが入ってきた。

すると、プラスルとマイナンはそのサーナイトの方へ向かっていった。

「ルルお姉ちゃん！爆弾なくちゃった〜！」

「僕はナイフ無くちゃったよ〜！」

マイナンは爆弾をなくした事を訴え、プラスルはナイフをなくした事を訴えた。

すると、ルルと呼ばれたサーナイトは…………

「アレで遊んじゃいけないって言ったでしょ？というか何処からそんな物手に入れたの？」

普通だった。

ルルは精神異常者ではないようだ。

「何処って……………」

「爆弾は僕が家の包丁を持って爆弾工場に行って脅して手に入れて、ナイフはサバイバルナイフを売っている所に行って、包丁で脅して手に入れた！」

結局全部、プラスルが脅して手に入れたらしい。

「そんな事しちゃダメでしょ！」

ルルの説教が始まった。

が、始まってまもなくその説教は終了した。

え、何でかって？

それは……………

「きゃっ、あの人カッコいい！！」

偶然星と目が合い、一目惚れしてしまったようだ。

そこから、星の所まで来て、何やらアピールし始めた。

「私、ルルって言います！え〜っと私と食事に行きませんか？あ、貴方の名前を教えてください！」

「え？お、俺は星って名前だけど……………」

逆ナンってやつ？

作者は時代についていけないタイプなので良く分かりませんが……

-
-
-
-
-
-

何かメンドくさい状況に追い討ちをかけるかのように、メンドくさい奴らが帰ってきた。

「ハアゝマジかったりいゝ」

ソラ達が帰ってきた。

袋などをもっている事から、買った事が分かる。

「お？星、目が覚めたみたいだね！で、誰その女の子。」

状況を全く理解出来ていないシンは、星に質問した。

「今知り合ったルルって子だけど……何か食事に誘われた。」

「『『『へえ』……つてええええええええええ！！！？？？」

本日二度目の納得した直後の大絶叫。

「ど、ど、どした!？」

馬鹿には何故驚くのか理解出来ないようだ。

すると、四人は星から離れた所でヒソヒソ話を始めた。

「あの星がナンパされるなんてな……………何かの冗談だろ、どうせ……………」

「あいつ、モテなかったはずだが……………」

「確かに、恋愛とは無縁だと思うけど……………」

「イケメンでもないのに、何で好かれてるんだろ？」

本人が聞いたらショックを受けそうな会話だ。

だが、呑気な星は何を話しているかを気にする気配もない。

しかも……………

「ルルだったけ？飯食いに行こうぜ！俺腹減った。」

恋愛？どういう意味？とでも言っているかのようにただ腹が減ったからご飯を食べに行こうとする。

確実に乙女心が分かっていない。

「あつ、はい！」

だが、そこで全く空気を読まない悪魔が現れる……………。

「グハハハハハ！！金をよこせ！！さもなくばこの爆弾を爆発させるぞ！」

「このナイフの切れ味を知りたいか？ああ！？」

さっきの子供みたいな態度とは打って変わったプラスルとマイナ
ン。

爆弾とナイフを突きつけて、ポケモンセンターの店員に金を出す
ように脅している。

「ハア……………いい加減にしなさい！！」

ルルが怒った。

女は怒り出すと、納まるまでガミガミ説教を続ける。

勿論、ルルもそうだ。

プラスルとマイナンは正座をしながら、説教されている。

当然、飯の話はなくなる。

「俺……………腹減った……………」

見事なKYっぷりだ。

「リンゴやるから、部屋にもどってろ（汗）」

ソラはこれ以上面倒なのは嫌だと思い、星を帰らせた。

「リンゴ」

「星の部屋」

「あゝ美味かった。」

星はリンゴを食べ終え、ベッドに横たわった。

「ん……………そうだ！何か大会中止なつたらしいから、次はこの町で開かれるか調べねえと！」

ベッドから降りると、サービスとして用意されたパソコンへ直行。インターネットを開くと、ありえないスピードで字を打ち出した。

「え〜っと、あった！ガノトシティか！」

ガノトシティと呼ばれる町で行われるらしい。

「まだ午前十時だし……………今から行くか！」

荷物をまとめると、部屋から出た。

「ロビー」

「おい！皆！ガノトシティ行こうぜ！」

全員の荷物を持ってきた星。

「は？今日一日くらい休もうぜ」

ソラが提案する。

だが、星がそんな事を受け付ける訳がない。

「ダメダメ！じゃ、行こうぜ！」

いつの間にか、ソラを除いた全員が荷物を持っていた。

「ちっ……」

準備が完了し、ポケモンセンターを出ようとした時、ルルが彼ら
を呼び止めた。

「あの！」

「ん？何？」

星が聞く。

「えっと、私達も仲間に入れてもらえないでしょうか？実は、私達も旅をしていて……」

「え？全然いいよ！」

「『『『軽っ！』『』『』」

あまりの即答に、全員で突っ込んだ。

ルルと悪魔幼児の三人が仲間になった。

元々賑やかだが、これから更に、賑やかになりそうなチームであった。

新たな仲間！恋する乙女&悪魔幼児！（後書き）

何か、グダグダですいません（汗）

星

「おい（汗）」

自分でも書いてて意味分からんと思いました（汗）

誰か文章力をくれー！！

ガノトシティ崩壊 黒幕登場（前書き）

今回！凄い事が分かります！

ソラ

「タイトルからして……………だいたい分かるんだが（汗）」

まあ、良いんだって（汗）

ガノトシティ崩壊 黒幕登場

「数時間前のガノトシティ」

「……………ここが世界経済の中心と呼ばれる事で有名なガノトシティか……………ククッ、壊し甲斐がある……………貴様ら、やれ。」

「うおおおおおおおおお！！！！」

ある集団がときの声をあげて、ガノトシティを襲っていった。

その集団に者は、手当たり次第に建物を破壊し、また、邪魔する者は凶器で殺して行った……………

「ガノトシティへ向かう道」

この道を歩いているチームがある。

言うまでもなく、チームメテオだ。

彼らはガノトシティで起こっていることを知らない。

つまり、緊張感のきの字もない状態なのだ。

「ガノトシティって超都会だから、高層ビルいっぱいありそうだな」

「料理もつまいだろうな」

こんな会話が続けている。

「ああ、もう楽しみウが多すぎて我慢できねえ！早く行こうぜ！」

ガノトシティへ向かって走りまわるのは星。

「あ、待って！星さん！」

それを追うのはルル。

「あゝあ、かつたりい。みんな、ゆつく」

ソラが言い切る前に、全員が星を追って走り出した。

「おい、ちよっ！待て！」

慌ててソラも追う。

「んっ！？何だあれ？」

何やら大量のポケモンがガノトシティの方角から走ってきてるのだ。

しかも逃げるかのように。

「おい、どうした？」

レンが逃げるポケモンに対して聞く。

「いいい、今！が、が、ガノトシティが襲撃されてるんだ！あ、あんたらも早く逃げたほうがいい！じゃあな！」

そう言った後、そのポケモンは逃げていった。

「皆、行って見よう！」

メンバーはガノトシティへ走った。

「ガノトシティ」

「な、なんだよコレ……」

一同はその光景に愕然とした。

まるで、戦争のあった後みたいだった。

高層ビルや建物は倒れ、ポケモンはいたる所に傷を受け、死んでいた。

「何があつたんだ一体……」

「皆、この辺りを搜索してみよう！誰か生きてるかもしれない。」

シンの意見に、全員が賛成した。

「……………見つけたっ！」

建物の影から、メンバーをみているポケモンの姿があった。

「俺とシンは北、ルルとプラスルとマイナンは西、ソラとミントは南、星は一人で東を頼む。」

レンはチーム分けをすると、全員自分の搜索方向へ向かった。

「レン、シン」

「酷いことになってるね、レン……………」

「ああ。誰がこんなことを……………」

「俺らだ。」

二人が話していると、突然後ろから声がした。

「っ！き、貴様は……………」

レンはその人物を知っていた様だ。

「ほう、俺を知っているのか。」

そこには、ウィンディと大量の武装をしたポケモンの姿があった。

「ああ……………忘れもしないさ。よくも俺の友を殺したな。」

何やら訳有りのようだ。

「友？ああ、あのミズゴロウか。ということはお前はあの時のアチヤモか。」

レンの目は怒りに満ちていたが、ウィンディは至って冷静だった。

「友の仇！貴様を殺す！」

「俺を殺すか……その言葉、そっくりそのまま、お前に返してやるう。」

「ソラ、ミント」

「ひでえ………」

周りに血を流してるポケモンの姿が多くあった。

「何で………」

ミントは見るのも辛いようだ。

そこへ……

「お二人も横に倒れてみる？」

やけにハイテンションな声がした。

「誰だ！？」

そこには、一匹のエーフィがいた。

仲間の姿はない。

「私は『デス』の八幹部の一人。あなた達を殺しにきたのだ。」
どうやら、さっき影で見つめているのはこのエーフィだったようだ。

「だから、死んでくれる？反撃されると……ね？」

「馬鹿かてめえ？十万ボルト！」

「シャドーボール！！」

ソラとミントは攻撃をする。

だがエーフィは……

「なっ！？」

技を出さず、わざと攻撃を受けたのだ。

「フーン……この程度ね……なら本気を出す必要もないわね……ゆ
っくり痛めつけて殺してあげる」

掠り傷すらなく、更にいたって冷静だった。

「ミント……気をつける……こいつは今までの奴らとレベルが
違う!」

「う、うん!」

「さあ、行くわよ!」

「ルル、プラ&マイ」

「誰がこんな事したのかしら………」

ルルは少し怖がっているようだ。

「僕達も参加したかったな」

「更なる地獄を与えられるのに。」

相変わらず、とんでもない奴らである。

「こら！そんな事しちゃダメ！」

ルルの説教を食らった。

「お前らにも同じ地獄を見せてやろうか？」

「「「っ!？」」」

三人はぶるつと震え、恐る恐る後ろを振り向いた。

そこにはメタグロスの姿があった。

「探す手間が省けたな。さあ、闇の宝玉を渡してもらおうか。」

突然現れたメタグロスは手を差し出した。

「くっ、そんなもん持ってねえな！帰りやがれ！」

「しつこい男は嫌われるぜ？さあ、帰った帰った！」

プラスルとマイナンは庇うかの様に、ルルの前にたち塞がった。

「庇う………ということはその女が闇の宝玉を持ってるんだな。」

「ちっ………マイナンやるぞ」

「言われなくても分かってるぜ」

「ふっ………来い」

く
星

「なんてこった……酷過ぎるぜ……」

星も搜索をしていた。

だが、周りには死んでいるポケモンばかり生きているポケモンの

姿は見つけられなかった。

「止まれ」

目の前に一匹のポケモンが現れた。

長い尻尾と白い体を持つポケモン

ミュウツーが現れた。

「……………誰だてめえ？」

「私の名はミュウツー。」

素直に名乗るミュウツー。

「そのミュウツーさんが俺に何の用だ？」

「貴様を潰しに来た。」

「何もんだてめえ？」

冷静なミュウツーに質問をする星。

「私か？私はこの世の新たな神、つまり『デス』の……………」

ボスだ。」

「っ！！」

遂に現れた黒幕。

その正体はミュウツーだったのだ。

「お前が……………ならほっとく訳には行かないな……………やってやるよ……………」

「面白い……………私の攻撃に何処まで耐えられるかな」

「攻撃に耐えるのはお前の方だ！」

ガノトシティ崩壊 黒幕登場（後書き）

はい、黒幕はミュウツーでした。

ミュウツー

「私が『デス』のボスだ」

こいつが何をするか見物ですな

ミュウツー

「目的はせ」

ちよっｗｗｗｗネタバレ禁止！

燃え上がれ怒りの爆炎！俺の怨みを思い知れ！（前書き）

今回の更新で、暫く更新出来なくなります。
勝手ですが、ご了承ください。

燃え上がれ怒りの爆炎！俺の怨みを思い知れ！

デスの大軍によって、壊滅してしまったガノトシティ。

そこには炎を操る戦士・レンがいた。

長年追ってきた友の仇……必ずここで潰す！

レンは決心した。

自分は今日、今、ここで、目の前に居る敵を、絶対倒すというこ
とを。

「俺はお前を殺す！絶対にな。」

レンの迫力に、デスの大軍は圧倒されていた。

ただ一人、ウインディを除いては。

「ハハハ！俺を殺す……か。面白い冗談だ！」

「灰になれ！火炎放射！」

先手必勝！と言わんばかりに攻撃を仕掛けたレン。

「火炎放射」

だが、ウインディは全く焦らず、同じ技で相殺した。

因みに、このウインディの特性は貰い火ではなく威嚇なので、炎技は一応効く。

「この程度か？それじゃ余興にもならんぞ。」

「黙れ！炎のパンチ！」

ホットする暇も与えず、連続攻撃を仕掛けるレン。

「神速！」

だが、ウインディは炎のパンチを神速で避け、その勢いのままレンに突進する。

「クソがあ！！スカイアッパー！」

避けられたことに怒りを覚えたのか、いきなり攻撃をするレン。

だが、冷静さに欠けてしまったレンの攻撃など、ウインディに当たるわけがない。

「神速！そして雷の牙！」

攻撃はなんなく避けられ、逆にダメージを与えられてしまった。

「グッ！貴様！」

怒りに身を任せ、攻撃を続けようとしたレン。

だが、彼はあることに気づいた。

「体が……動かない……？ まっ、まさか！」

「その通りだ。お前は俺の攻撃で麻痺したのさ。さて、ちょこまか攻撃されるのは厄介だ。ここで倒れてもらっ。」

ウインディがレンを攻撃しようとしたその時、何故かウインディが吹っ飛んだ。

「僕を忘れてもらっとな困るだよね。」

シンだった。

ウインディとレンが戦ってる間に、デスの兵を全滅させたようだ。

「あの兵を全滅させるとは……貴様も只者ではないようだな。」

「それほどでも。そうだ、レンこれを食べて！」

シンはレンに何かを投げた。

レンは口でキャッチし、それを食べた。

「この味は……ラムの実か！」

「ちっ、まあいい。これからは本気で行く！」

すると、ウインディは神速を超えたスピードでレンに突進した。

「なっ！？ 速い！」

「サイコキネシス！」

全力でサイコキネシスを使い、強制的にウインディを止めたシン。

「今だレン！」

「任せろ！食らえ！これが俺の怒りだ！！ブラストバーン！！」

「し、しまった！」

炎タイプ最強の技・ブラストバーンを使ったレン。

流石のウインディもサイコキネシスで動けなかった為、炎に吞まれた。

「ぐわあああああ！！」

灼熱の炎に撃たれ、大ダメージを負い、倒れた。

誰にも、その様に見えた。

「なんてな……………この程度の炎で俺を倒せると思ったか？」

なんと、ウインディは余裕の表情で立っていた。

「馬鹿な……………」

レンは愕然とした。

無理も無い。己の持つ最強の技を出したのに、相手には傷一つついてない。

「これが八幹部……………」

シンもその場に立ち尽くした。

「フン、雑魚が。」

その時、レンは自分にとてつもない無力感を感じた。

「さて、そろそろ終わりにするか……………大文字!!」

「まだだ……………まだ負けない!友の仇を討つまでは!」

だが、レンは無力感を吹き飛ばし、再び戦意を露にした。

「こっちも大文字だ!!!」

二つの大文字がぶつかった。

そして、それはそのまま相殺した。

「お前何かには負けない!うおおおおお!!」

その時、レンの体に炎が渦巻き始めた。

何かが起こったのだ。

「これが俺の新たな力、ファイアブレイク!」

レンの体の炎は更に激しく燃え上がった。

「何だこいつ……いきなり戦闘力が上がりやがった！」

思わず後ずさりするウインディ。

「逃げなければ……」

「させん！バーナーパンチ！」

炎のパンチの強化版とっていい技でウインディを殴り飛ばしたレン。

「す、凄い！これなら行けるぞ！」

シンも勝てると確信し、自分も協力しようと攻撃態勢に入った。

「僕も行くぞ！食え！ラスターパージ！！」

光をぶつけ、更にダメージを与えるシン。

勿論、レンも攻撃した。

「ぐっ、負けるか！神速！」

「逃がすか！高速移動！」

逃げすまいと思ったレンは神速に対し、高速移動で付いていった。

「ハア……ハア……」

ウィンディは逃げようと、更にスピードを上げたが、息切れをしてしまった。

「くっ、一体どうすれば……」

「もう遅い。」

レンはウィンディに追いついた。

「ま、待ってくれ！今回だけは見逃してくれ！」

「………ブラストバーン！！！！」

ウィンディは命乞いをしたが、レンは聞く耳持たずの状態だった。

最後にフルパワーのブラストバーンを放った。

「うっ、うわあああああああ！！！！」

ウィンディは焼かれ、灰になった。

「仇！ここに討ったぞ！」

レンはそう叫ぶと、倒れた。

「ご苦労、レン。」

シンは静かにそう言った。

やる気0%、逃亡率120%！？ある意味究極のバトル！（前書き）

皆さん、お久しぶりです！

星

「ちいーっす！」

それじゃ、早速！

星

「どうぞー！」

やる気0%、逃亡率120%！？ある意味究極のバトル！

レンとウインディの戦いはレンの勝利に終わった。

シンは、レンを運びながら星を探していた。

一方、エーフィと戦う羽目になったソラとミントは……

「いつまで逃げてるの？シャドーボール！..」

「危ねえっ！」

「.....（汗）」

エーフィとソラは戦っていた.....いや、追いかけてこしていた。

何故、ミントは参戦してないかって？

多分、影薄いから忘れられてるのだろう。（笑）

「スピードスター！」

「だあゝもう！鬱陶しいなこの野郎！（怒）」

「……………（滝汗）」

ミントはこの状況をどうすればいいのか分かっていない。

「ちょこまかちょこまかウザいわね！サイケ光線！」

「ウザいのはてめえだっつーの！」

それでもソラは反撃せず、逃げ回る。

「ホントツ鬱陶しいな！影分身！」

「錯乱させようたって、そうは行かないわ！サイコキネシス！」

サイコキネシスで、片っ端から影分身を消すエーフィ。

だが……………

「え！？本体がない！？」

「俺なら、此処だ！食らえ雷の牙！」

いつの間にか、本体はエーフィの後ろにまわり、不意打ちをかけた。

「痛いわね！この虎！」

「へっ！影分身6連発！」

六連続で影分身を使い、更に逃げ回るソラ。

『さあ、捕まえて見やがれ！中年おばちゃん！』

分身が一斉の挑発する。

だが、ソラは知らない。

女におばさんと言うと、どんなことがおきるのかを……

「誰がおばちゃんだ、ゴラアアアアアアア！……？？？」

ブチギレた。

「この虎アアア！！」

「うるせつーの！黙れ中高年！」

挑発をやめないソラ。

「○# ♪！……！！」

既に何をいつてるのか分からない。

かなりのキレ具合だ。

「シワ増えるぜ、そろそろ落ち着け。」

「余計なお世話じゃあああああああ！！破壊光線！！」

あんまりキレ過ぎて、大技・破壊光線を出してしまったエーフィ。

「おっ！ならこっちは……………」

ソラは一瞬身構える……………」が。

「ソラ流必殺奥義！逃げる（笑）」

破壊光線を避けるソラ。

そして、エーフィに歩み寄り、話しかけた。

「やれやれ、怒りに任せて戦っても、敵う訳ないだろ？」

「うるさい！お前が挑発するから……………」

「あゝあ、こりや相当な馬鹿だな。俺が挑発した意味も見抜けないとは……………まっ、いつか。さて、止めを刺してやる。」

ソラの挑発した目的……………それはエーフィに破壊光線を撃たせる為だった。

破壊光線は威力こそは大きいものの、使った後、反動で動けなくなるというデメリットがある。

そして、エーフィはソラの作戦にまんまと引っかかった。

「ジ・エンドだ、おばちゃん。ギガインパクト！」

「うわあああああああああ！！！！」

ソラの攻撃により、エーフィは倒れた。

「あゝあ、疲れた……………」

「そ、ソラってこんなに強かったわけ？」

ミントが、ソラに質問する。

「あ？運だよ、多分。」

と、曖昧な返事をするソラ。

だが、彼の实力は本物である。

「めんどくさいけど、他の奴ら探すか……………」

エーフィとのバトルに勝利し、その实力を見せ付けたソラ。

彼は、星を探すことにした。

一方、ルルたちは……………

「くそっ
.....」

「俺らじゃ敵わない
.....」

プラスルとマイナンは、メタグロスと戦った様だ。
だが、惨敗したらしい。

「さて、闇の宝玉を渡してもらおう。」

「い、嫌っ！」

ルルに迫る、幹部かと思われるメタグロス。

そして、闇の宝玉と思われる玉を奪おうとする。

「ああ！？闇の宝玉だせつつんだろっが！」

「きゃっ！」

メタグロスに殴られ、倒れてしまうルル。

（もう……ダメ……）

拳を構え、殴ろうとするメタグロス。

「くたばれ！」

「てめえがな！」

殴られたのは、メタグロス。

見れば、ソラの姿があった。

「ちっ、邪魔がはいったか……………」

「悪いね、邪魔で。たが、てめえにはやられてもらっぜ」

メタグロスとソラの対決は一對どっちが勝つのか…………。

戦いが始まる……………

やる気0%、逃亡率120%！？ある意味究極のバトル！（後書き）

と、まあソラメインの話でした。

ソラ

「あゝ、疲れた。」

星

「作者、俺の出番は？」

次の次だね。

星

「はやく更新しろよ！」

了解す。

メタゲロスの力（前書き）

はい、またまたお久しぶり！

ソラ

「おい、作者。何だ、今回の結果は！」

あれ？駄目だった……かな

ソラ

「やっとリタイアできるじゃねえか！」

おい（汗）

メタグロスの力

「雷の牙ア！」

「守る」

ソラとメタグロスが戦っている。

が、ソラの技はほとんどスカされるか、守るで防がれていた。

「噛み砕く！」

「影分身」

と、メタグロスには、一切のダメージが与えられていない。

「クソ！チャージビーム！！」

「守る、サイコネシス」

ソラの攻撃は守るでガードし、サイコネシスで攻撃する。

正に最強の戦法だ。

（俺の攻撃は全て避けられるか、ガードされてるな……………スピードをあげてやるか……………）

と、ソラはすぐさま作戦立てた。

「高速移動！」

「……………自分のスピードをあげる……………面白い。やれるだけやってみろ。」

「高速移動！」

ソラは、これを繰りかえし、自分の素早さを上げられないくらいまで上げた。

「さあ、行くぜ！突進！」

「アームハンマー！！！」

突進するソラに対し、自分の素早さを下げて、相手を攻撃する高威力のアームハンマーで反撃。

「自滅狙ったか？そのスピードを犠牲にすると、俺に攻撃を当てられなくなるぜ？」

「づべこべ言わずに来い……………」

「なら遠慮なく！捨て身タックル！」

「アームハンマー！！！」

と、アームハンマーばかり使うメタゲロス。

彼のスピードは確実の落ち、既に限界まで来ていた。

だが、何故かメタグロスは笑っていた。

「自分苦しめんのそこまで楽しいか？Mだろお前。」

「勝手に考えてろ…………アームハンマー！」

このアームハンマーはソラを吹き飛ばし、それと同時にメタグロスの素早さを完全に下げた。

「そろそろ死んでもらおう」

「こっちの台詞だ！突進！」

メタグロスに突進を仕掛けたその時！

「馬鹿がア！！お前はかかったんだよ！俺の策にい！！」

「なっ！？」

「くたばれ！ジャイロボール！！」

そう、メタグロスはジャイロボールの威力を最大限まで高めることが目的だったのだ。

ジャイロボール…………それは自分の素早さが相手より低ければ低いほど威力が上がる物理技。

メタグロスは攻撃が高く、物理系に秀でているため、最大限にジャイロボールの威力が引き出されたのだ。

「ぐわあああああああ！！！」

「止めえ！！バレットパンチ！！」

ジャイロボールを食らい、動けなくなったソラに、止めの一撃が入った。

「がはっ……………」

「ケケケ、死んだか……………」

地面に倒れ、目を瞑ったソラ。

呼吸は消え、体が冷たくなっていた。

そう、彼は『死んだ』。

「さて、ミュウツー様に報告に行くとしよう。」

「「させない！」」

その場を去ろうとしたメタグロスの前に、ルルとミントが立ちふさがった。

「あ？テメエらも死にたいか？」

「アンタよ、死ぬのは。」

「私たちが倒してやる！」

メタグロスは挑発するが、二人はそれを返した。

「一撃で殺してやろう。堪える！更に、大爆発！！」

「「なっ……！」」

メタグロスは大爆発を起こし、二人を一瞬で倒した。

「ハハハハハ！！死んだか！！」

煙が晴れ、全てがはっきり見えた。

二人も、ソラと同じように、死んだ。

「さて、報告に行くか………」

メタグロスはその場を去っていった。

星VSミュウツー

ガノトシティ……つい、さっきまでは世界屈指の大都市と呼ばれていた。

が、『デス』の侵略によってそこは壊滅し、血も涙もない戦場となっていた。

その戦場の中心に、二人のポケモンが睨み合って居た。

チームメテオのリーダー・星と、『デス』の総統・ミュウツー。

二人とも、立ったまま動かない。

「……………どうした？来ないのか？それとも、怖気付いたか？」

「……………俺がそんな挑発に乗ると思うか？知ってるさ。お前は俺の戦い方探ろうとしてる事くらい。」

「フッ、ならばこちらから行かせて貰おう！サイコカッター！」

ミュウツーがサイコカッターを繰り出す。

「ボーンラッシュ！」

星は自分に近づいたサイコカッターを打ち落とす。

「電撃波」

ミュウツ―は必ず当たる電撃波を繰り出す。

それに対し、星は波導弾を繰り出した。

「波導弾！」

「瓦割り」

すると、ミュウツ―は一瞬で星の後ろに回り、攻撃を繰り出す。

「冷凍パンチ！！」

「そんなもの当たるか。」

超低温のパンチを繰り出す星の対し、冷静にかわすミュウツ―。

「クソ……さっきから一発も攻撃が当たってない……」

「これが、力の差というものだ。」

ミュウツ―は冷静である。

それとは対照的に、星は焦りまくっていた。

自分の攻撃が全く当たらない……このままではいつかくたばってしまっ……

そんな不安からの焦りだ。

「今なら命だけは助けてやろう。降伏し、二度と私に抵抗しないと

約束するならな。」

「ふざけんな！まだ、とっておきがある！必殺・波導流星群！」

自分が持つ最強の技を使ってミュウツーを攻撃する星。

波導流星群はミュウツーに直撃した。

大きな爆発音が起こり、ミュウツーのいた場所には巨大な穴ができる。

「やったか……」

「何だ、この程度か……」

「っ！？」

勝利したと思った星は、穴の中から聞こえる声に驚く。

その声の主は、紛れもなくミュウツーだったからだ。

「う……そ……だろ……」

穴の中から浮かんできたミュウツーは全くの無傷。

しかも、むしろそれで力をつけている様な感じだ。

「どんな技でも私には通用しない。私の特殊能力は……『吸収』。」

「吸収？どういうことだ？」

「全ての技はエネルギーを使う。私はその技の中のエネルギーを吸収できるのだ。」

「そんな……それじゃ無敵じゃねーか……」

絶望した。

一切のダメージは与えられない。

攻撃すれば逆にエネルギーを与えてしまうことになる。

かといって何もしなかったから自分が殺られる。

だが、何もできない。

「分かったか？お前にとってこの戦いは、はなから勝ち目がないのだ。」

「クソッ……」

「さて、そろそろこっちから行く。破壊光線！」

ミュウツーは星に極太の光線を放つ。

突然の攻撃を避けきれなかった星は正面から一撃をもらった。

「寝るにはまだ早い！サイコ光線！」

「うがっ……！」

「死ね……日本晴れからソーラービーム！」

止めの一撃と言わんばかりに、超威力のビームを撃つミュウツー。

「うわあああああああー！」

星に直撃したソーラービームは大爆発を起こした。

「フン……」

ミュウツーはその場を去ろうとした。

だが、その時、後ろで声が聞こえた。

「ま……ちや……がれ……」

何とか立った星は、ミュウツーを睨む。

「ハア……ハア……うおおおおおー！」

金色のオーラ　　つまり波導モードが発動したのだ。

「食らええええー！！インファイト！」

「なっ！？」

突然の攻撃に驚くミュウツー。

が、特殊能力によってダメージが与えられることはなかった。

「危なかった……」

「ち……く……しょう……」

残った力を振り絞って繰り出した技も、何の効果はなかった。

星はそのまま気絶した。

「死んでもらおう……」

星に手をかざし、最後の一撃を放とうとするミュウツー。

その時、ミュウツーの脳内にテレパシーが流れた。

『ミュウツー。ただちに戻れ。』

「……承知」

ミュウツーは星に止めを刺さず、その場を去った。

星VSミュウツー（後書き）

星

「おい、ミュウツーチートすぎるだろ（汗）」

ボスだからね。

星

「で、最後にできた奴誰？」

さあね

星

「今すぐ教える！」

やゝなっこった！

カシスオレンジ流必殺奥義！逃走の術！

星

「逃げやがった（汗）」

決意（前書き）

え、若干スランプでしたが、何とか物語を進めることができました（汗）

星

「大丈夫かよお前（汗）」

多分問題ないよ。

決意

俺は……………死んだのか……………？

「ん……………ここは……………？」

「気がついたかい、星」

目を覚ました星に話しかけたのはシンだ。

その横には、レンが座っている。

どうやら、この場所は山の頂上のようなのだ。

「シン！それにレン！お前ら無事だったのか？」

仲間に気付कि、慌てて起きる星。

「俺とシン、そしてプラスルとマイナンは大丈夫だ。が……………」

レンはそこまで話して、急に黙り込む。

「何だよ……………『が』って……………」

星が聞くと、シンが無言で指を指した。

指された所を見ると、そこには信じがたい事実があった。

ソラとルルとミントの亡骸があった。

「おい…………嘘だよな…………」

「…………嘘じゃないよ」

そこに、プラスルとマイナンが来た。

「僕達の目の前で…………殺されたんだ」

「そんな…………」

星はその場にしゃがみ込む。

彼の目からは、大粒の涙が落ちていた。

「もう過ぎたことだ。今更泣いても遅い」

レンが星に言う。

「そんな言い方はないだろ！仲間が殺されて、お前は悲しくないのか！」

星はレンの所に歩み寄り、その胸倉を掴む。

「……………」

レンは無言である。

「何とか言えよ！」

星は拳を振り上げ、レンの頬を殴る。

「……………悲しく無い訳ないだろ」

ボソッと一言呟くレン。

「クソッ！」

星は、山を降りようとする。

シンはそれを慌てて止める。

「どこ行く気！？」

「仇を討ちに行く」

「待てっ！」

レンが怒鳴る。

「今行っても殺されるだけだ。」

「じゃあどうすんだよー！」

怒って、レンに怒鳴る星。

「力が足りないからあいつらはやられた。二の舞はよせ。」

「……………僕に考えがある」

黙っていたシンが二人に話しかけた。

「何だ？」

星が聞き返すと、シンは語りはじめた。

「僕には、一人の知り合いが居る。そいつの所で修行するべきだ。」

「誰だ？」

レンが聞くと、シンはこう答えた。

「天空の神、レックウザ」

「……何！？」「……」

星、レン、プラスル、マイナンは声をそろえて驚く。

「名前はジンムス、知ってると思うけど、雲の上に住んでるよ」

「そんな所に、どう行くんだよ！」

「ここから約千キロ離れた、碧龍山。その頂上に、天空への階段がある。そこを上れば、ジンムスは居るよ。」

何だか、夢の様な話だが、シンの顔は真顔である。

「……………行こう」

星が呟く。

皆も頷いていた。

（翌日）

「皆、準備は良いか？」

『ああ』

皆は荷物を持っていた。

星は、昨日造ったと思われる墓の前に立つ。

「……………ソラ、ミント、ルル。俺は絶対、お前達の仇を討つ。何とかして、お前らを生き返らせる。待っていてくれ！」

そう言いつと、星達は山を降りた。

山の頂上に、暖かな風が吹いた。

決意（後書き）

気が付いたら、僕がここに来てもう半年経つのか。

星

「何かイベントやんの？」

うーん……………コラボやりたいけど……………

星

「無理だろ」

まあ、色々考えてみるよ。

カイルとの出会い（前書き）

フフフ……

星

「どうした？」

聞いて驚け！見て笑え！

星

「笑っちゃダメだろ（汗）」

今回はコラボです！

星

「おお〜！で、誰と？」

それは………本編を見れば分かる！

星

「そうなるのね（汗）」

カイルとの出会い

とある森、そこには三匹のポケモンがいた。

「師匠！ここどこですか？」

黄色のポケモンが、自分の居場所を訊く。

「分かる訳ないだろ。」

師匠と呼ばれた男は軽くそれを受け流す。

「ここって本当にどこですか？」

「さあ、わからないな。」

声からして、メスだと思われるポケモンの質問も、男は軽く受け流した。

「僕たち、どうすればいいんですか！もういやだ〜！！」

黄色のポケモンは叫びながらどこかに走っていった。

「おい、ライト！………まったく………追いかけるぞ、ルリ。」

「はい、師匠！」

二匹は、逃げ出したライトを追っていった。

星達はジئمムスのいる碧龍山を目指し、その途中で通過するリウスタウンにいた。

リウスタウンは小さな町であるものの、犯罪は殆どない平和な町だった。

「ハァ、俺らの住んでる町もこんな町だったらな」

星は愚痴をこぼす。

「しょうがないよ、今は世の中が乱れてるからね。」

シンはそれを流す。

「星、今日はこの町に泊まろう。次の町までかなり距離がある。」

レンは町に泊まる提案をだす。

「OK」と星は賛成する。

シン、プラスル、マイナンも賛成する。

「泊まる所探そうか。」

「あそこでいいだろ。」

星が指差したのは、一般の旅館であった。

ただ、看板に、

「黄金の旅館　ダイヤモンド・オブ・グレートエメラルドホテル」
と書いてある。

悪い旅館ではなさそうだが、完璧に名前負けしている。

「よし、夜まで自由活動にする。」

レンの提案によって自由活動が始まった。

「よっしゃー！遊んできてやる！」

星はとつとと去っていった。

「……………相変わらず落ち着きがない奴だ」

レンがぼそつと呟いた。

「色んな店があるな」

星は鼻歌を歌いながら、商店街をあるいて行く。

「ん？武器屋？」

星はある武器屋の前で立ち止まった。

「寄ってくか！」

星は店の中に入っていった。

中には武器屋と書いてあるだけの武器が揃っていた。

「すげー斧だな……ん？」

星は壁に掛けてある長さ１メートルほどある剣を見つめた。

剣は青く光り、禍々しいオーラを出していた。

（何だこの剣……見たことがある気がする……）

星は心の中でそう呟いた。

（こんな剣、知らない。だけど見た覚えがある。）

星が剣をじつと見つめていると、店の奥から店主が出てきた。

「いらっしやい、お客さん。」

「あつ、どうも。」

星は軽い挨拶をする。

星のもとに店主がきて、剣の解説を始めた。

「その剣はこの店にずっとあるものだ。ただ、何故か誰もこの剣を鞘から抜くことが出来ない。」

星は剣を取って、抜こうとしたが、接着されているのではないかと疑うくらい、抜けない。

「なるほど……この剣貰ってもいいか？」

星は店主に剣を要求する。

もらえる訳ないと思われる台詞だが、店主は意外な答えを出した。

「ああ、いいよ。」

「やっぱり……えっ、マジで!？」

星は驚く。

「この剣を買う人もいないし、邪魔だから捨てようと思ってたからな。引き取ってくれるなら有難い。」

「よっしゃ！貰った！」

星は上機嫌で旅館に戻ろうとした。

その時、星から30メートル離れた所から、砂埃が見えた。

ある影が、凄く速いスピードで走ってきたのだ。

「わあ、どいてー!！」

「げっ！やべっ!！」

星は急いで避けようとしたが、間に合わずにぶつかってしまった。

「痛てて……何だお前!！」

「す、すみません……」

影の正体は一匹のピカチュウだった。

「まあ、いいよ。お前、名前は何だ？」

星はここで怒鳴るのもよい選択ではない為、そのピカチュウを許すことにした。

「あ、僕ライトといいます！あの、あなたは？」

ピカチュウはライトと名乗る。

「俺は星って名前だ」

星も名乗る。

「お前、何で走ってたんだ？」

星はそこにあつたベンチに腰を下ろしながら、ライトに質問する。

「僕は森の中で迷っていて……あ、そうだ！師匠を忘れてた！」

「師匠？誰だそれ？」

「…………俺だ」

星の質問に答えたのは、ライトではなく、後ろからした声だった。

星が振り向くと、そこには大剣を背負ったバクフーンと、腰に二

本の刀を挿した色違いのキルリアが、肩で息をしながら立っていた。

「搜したぞ、ライト」

「すみません、師匠……」

ライトは素直に謝る。

何かあったのは間違いない。

「おい、ライト。どういうことだよ？」

状況が全く把握出来ない星は、ライトに説明を求める。

ライトは紹介を始める。

「このバクフーンはカイルといって僕の師匠です。こっちの色違いのキルリアはルリちゃんといって、僕と同じ、師匠の弟子です！師匠、ルリちゃん、こっちのルカリオは星さんです。」

「へー、あんたカイルって言うのか……」

ライトの紹介を聞いた星は、カイルをジロジロ見る。

「何だ？」

鬱陶しい、という目つきでカイルは星を見返す。

「どうだ？俺と一戦交えないか？」

星は会ったばかりのカイルに、突然バトルを申し込む。

だがカイルは「面白いな。別に構わない」と何とOKした。

彼らは、森の方へ歩いていった。

く
森
く

「さて、やるか」

森の中央あたりにある、公園くらいの広場で二人は構えた。

星は普通に構え、カイルは大剣を抜き放った。

「さあ、いくぞ！電光石火！」

星は高速でカイルの後ろにまわる。

「甘いな！」

カイルは剣を振り回し、星はカイルから距離をとる。

「こっちからも行かせて貰う！初級剣技ノ参・連刺突！」

カイルは星に接近し、連続で刺突を放つ。

「見切り！」

星は間一髪で刺突をかわす。が、全てを避けることは出来ず、何発か受けてしまった。

受けた所から、少量の血が流れ出す。

「武器使うのかよ……ん！」

星は、刺突を受けたことで、何かを思いついたのか、自分に荷物をあさり出した。

「あつた……」

星は青く光る剣を手に取り、抜こうとする。

が、やはり抜けない。

「休憩してる場合か？中級剣技ノ壱・居合い！」

「そうは行くか！」

カイルの斬りを、星は鞘収められたままの剣でガードする。

その瞬間、剣から「カチッ」という音がする。

（……まさか！）

星は剣を鞘から抜く。

剣は簡単に抜け、カイルですら見とれるほどの金属独特の輝きを出す。

星はカイルから距離をとり、剣を眺めた。

剣の刃には、波導剣と彫られてあった。

「これなら……行けそうだ……」

星は胸をドキドキさせ、長い剣を構える。

「食らえ！中級剣技ノ四・交双閃！」

カイルは高速で剣を動かし、×状に斬りつける。

「負けるか！」

星も負けじと、剣の素早く動かす。

カイルの大剣と星の長剣は、金属音を出してぶつかり合う。

「そろそろ本気を出させてもらおう！」

「上等だ！」

二人は、お互いに距離を取り、その場で静止する。

（こいつを使うつもりは無かったんだが……………）

カイルは目を閉じる。

その瞬間、カイルから異常なまでの殺気が溢れ出す。

一方の星も、体中に力を込め、黄金のオーラを出現させる。

波導モードだ。

「行くぞ……………」

カイルは目を開く。

その目は黒ではなく、新緑に染まっていた。

つまりカイルの特殊能力、タイラント・アイだ。

「中級剣技ノ弐・満月斬り！」

カイルは強力な斬りを星に与える。

「回転斬り！」

星は回転をしながらカイルの斬りを防ぐ。

遂に、二人は剣を捨て、自分の力で殴りあう。

「メタルクロー！」

「炎のパンチ！」

二人は一進一退の攻防を繰り返す。

「そろそろ終わりにしてやる！」

カイルは剣を蹴り上げ、それをキャッチする。

「負けねえ！」

星は剣を取らず、そのまま構える。

「行くぞ！上級剣技ノ五・改・真空雷撃波！」

カイルは大剣から雷を帯びた衝撃波を発生させる。

その衝撃波は星へ向かっていく。

「必殺奥義！波導流星群！」

星は空中に無数の波導弾を出現させ、カイルにぶつける。

そこで、大爆発が起こった。

「ゲホッ、ゴホッ」

咳の音がする。

煙から姿を現したのはカイルだ。

間一髪、星の攻撃を避けたらしい。

「クソッ……なんてこった……」

一方の星は、雷の衝撃波を避けることができず、体中に大怪我をする。

「…………俺の負けだな」

星は素直に自分の負けを認める。

「一秒、避けるのが遅かったら、負けてたのは俺かもな」

カイルも星の強さを認める。

「さて、戻るか……」

二人は町に戻っていった。

町

「あつ、お帰り師匠！」

ライトがカイルに対して言う。

「結構ボロボロですね……」

ルリは苦笑いしながら言う。

「俺は大丈夫だ。それより、星のほうにダメージを受けてる。こいつの応急処置してやってくれ。」

ルリは頷いて、星に応急処置を始める。

ルリは慣れているのか、すぐに応急処置を終えた。

「ありがとう！」

星はルリにお礼をいうと、カイルの方を見る。

「カイル、今回は俺の負けだが、次は負けない。」

「ああ」

二人はお互いの目を見、握手した。

「いくぞ、ライト、ルリ」

「「はい！」」

カイルは立ち去ろうとする。

「またな、星」

「おう！」

カイルは町から去っていった。

星はそれを見届けた後、宿に戻って行った。

カイルとの出会い（後書き）

え、もう分かったと思いますが、シルバーさんが執筆されている「jokers」から、カイル、ライト、ルリにお越しいただきました！

星

「よくコラボできたな」

自分でもそう思ってる（笑）

因みに、今回の反省点はルリを空気化させてしまったことです。

星

「おいコラちょっと待て」

はい、強制終了！

星

「……………（怒）」

兄との三回戦 ジンムス登場（前書き）

星

「遅いんだよコラ（怒）」

ごめん、最近テスト勉強で忙しくて更新できなかった。

星

「そんなのが言い訳になると思ってたのか（怒）」

夜飯奢るから許してくれ。いや、下さい。

星

「俺がそんなのにつられると」

ステーキとキャビア（笑）

星

「ま、今回は許してやる！」

現金な奴め。ではどうぞ！

兄との三回戦 ジンムス登場

リウスタウンで一泊したチームメテオは、翌朝、そこを出発した。遂に彼らは碧龍山に到着したのだ。

あとはここを上れば、ジンムスと会うことができる。

「……着いたな」

星は真顔で高くそびえる碧龍山を見上げた。

曇りだった為、上の方が見えづらかった。

「おかしい……」

シンがボソッと呟いた。

「何が？」

不安そうなシンの表情を見たマイナンがきく。

「碧龍山に曇ることなんて10年に一度しかない。前に曇ったのは2年前なのに……」

それをきいて星も不安そうな顔をした。

何かが山の上で起こっている、というのは皆分かっていた。

「行くぞ」

「ああ」

星は声を掛けると同時に歩き出した。

メンバー達はそれに続く。

く中腹付近く

「山は一面の銀景色だった。」

余りの寒さに木は全て凍りつき、ただ立っていたただけだった。

「来たな、星」

星達が歩いているとき、突然声がした。

星が辺りを見回していると、一匹のルカリオが石の上に座っているのを見つけた。

「久しぶりだな……星……」

「ああ、またお前に会うとはな……銀河」

星を呼んだのは間違いなくGRESだった。

星の实の兄であり、憎むべき敵であるGRESだ。

「何でてめえがここにいるんだ？……また『デス』の命令か？」

「ご名答。ジンスの野郎を仲間になされると厄介だからな」

不気味な笑いを浮かべたGRESは、石から立ち上がった。

「そういうことが……ジンスはどうした？」

「ボスとやり合ってるさ」

グレスの答えを聞いた星の表情は一気に歪む。

ミュウツーと実際にやり合った星はその实力を知っていた。

全てにポケモンの常識を覆すほどの実力だ。

「ボスはお前が来ることも予測していた。お前を殺す為に俺が差し向けられたということだ」

「なるほどな……皆！」

星はメンバーに声をかける。

「皆は先に行ってくれ。俺は今日、ココでこの外道野郎を……潰す！」

「ダメだ星！」

星に近づこうとしたシンをレンが止める。

「……必ず追いついて来い」

「ああ」

レンは星を見て頷くと、メンバーを率いて山の上を登っていった。

「さて………銀河」

星は銀河を睨み、背中に背負った長剣・波導剣を鞘から抜き取る。

「そんな剣で俺が倒せるかな？」

微笑を浮かべたグレスも構える。

星は無言でグレスに斬りかかる。

「当たらないんだよ！」

斬りをかわしたグレスは星の顔を蹴る。

「クソ！」

星は蹴られて体勢を崩すが、すぐに再び構えた。

「波導弾！」

星はグレスに青い弾を撃つ。

だがそれはグレスの波導弾によって相殺され、更に続けて波導弾を撃たれた。

「斬！」

そう叫んだ星は波導弾を斬る。

星は斬った後の隙を突かれるのを恐れ、すぐに構える。

だがグレスの姿がなかった。視界から消えていた。

「後ろだ」

自分の後ろから低い声がした。

星は反射的に後ろを向く。

「終わりだ！インファイト！」

高速・高威力の拳が星の全身を殴った。

「クッ……」

星は長剣を落として吹っ飛んだ。

ゴツツという音とともに体が岩に直撃する。

「その程度か……」

呆れたような視線でグレスは星を見る。

凍え着くほど冷たい目だった。

グレスは星の落とした波導剣を拾うと、星に近づいた。

「畜生が……」

「じゃあな……」

血と悲鳴が宙を舞った。

く頂上く

「そろそろ辛くなってきたか？」

空中を飛ぶ白いポケモン
ケモンに話しかける。

ミュウツーは目の前に居る緑のポ

「我は負けぬ！破壊光線！」

緑の龍 レックウザのジンムスはミュウツーに破壊光線を放
つ。

「無駄だ」

無敵の能力・吸収を持つミュウツーは、その能力を使い破壊光線を己のエネルギーに変えた。

「おのれ！」

怒りを露にするジンムス。

攻撃する度に敵にエネルギーを与えてしまうのだ。

攻撃しても意味が無い。だが攻撃しなければ自分がやられてしまう。体力を消耗するだけの戦いであり、さらにやられる役しかない。

怒るのが普通だ。

だがその瞬間、ジンムスは思いついた。

特殊技がダメなら、物理技でダメージを与えるべきだ、と。

「ドラゴンクロー！」

超スピードでミュウツーに近づいたジンムスは鋭い爪で引っかく。

が、その攻撃はミュウツーには当たらなかった。

ミュウツーの体の回りにはバリアのような物が出来ていた。

「これが私の第二の能力……『究極守備能力』全てを防ぎ、跳ね返す」

「何だと……？」

ジンムスはその場で途方にくれた。

丸で人智を嘲笑うようなありえない無敵の能力の前に、戦意を奮い立たせる者はいない。

絶望の闇に堕ちたジンムスに、ミュウツィは容赦なく襲い掛かる。

「そろそろ貴様に消えて貰おうか……サイコキネシス！」

「ぬうつ！？」

ジンムスは体をミュウツィに操られ、自分で自分の体に攻撃をする。

「冷凍ビーム」

凍てつくほど冷たいビームが動けないジンムスの体に直撃する。

「これで終わりだ……破壊こつ」

ミュウツィは止めの一撃をジンムスに与えようとしたが、それは当たらなかった。

いや、発動されなかった。

攻撃が発動される直前、ミュウツーを攻撃した者がいたから。

「間に合ったみたいだね……」

「「「ああ」「」」」

そこには、シン、レン、プラスル、マイナンが居た。

「お久しぶりです……ジンムスさん」

シンがジンムスに挨拶をした。

「お前は……シンの小僧か！」

ジンムスは初めてシンに気付いたようだ。

「邪魔が入ったな……ここは引くか。貴様ら、また会おう」

ミュウツーは異空間を出現させ、中に入ってしまった。

「退却したみたいだな……ウグツ！」

「ジンムスさん！」

倒れこむジンムスの元にシンが慌てて駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

「我は大丈夫だ……少し外傷を負っただけだ。心配をかけてすまぬ。

「その者達は？」

ジンムスは平気を装ってシンに質問をした。

「僕の友達だよ。一緒に旅をしているんだ」

「そうか……助太刀、感謝する」

「いえ、当然のことでしたまでです」

レンはジンムスに言葉を返す。

「そうだ、星は？」

プラスルが星の存在を思い出し、声を上げる。

一方、星は………

く中腹く

「ちっ……」

GRESが手を押さえて後退りする。

GRESの目の前には、黒いオーラに包まれた星の姿があった。

「グオオオオ！」

不気味な声で叫ぶ星。

「まさか後一步の所で暴走しちまうとはな……」

グレスはさつき、波導剣で星を斬ろうとした。

剣の刃が星の首に当たる直前、星の体から黒いオーラが出現し、丸で意思があるかのように剣を止め、グレスの手に纏わり着いた。

グレスは慌てて剣を捨て、手を引っ込めたが、手は血だらけになっていた。

「グルルルル……ガアアアア!!」

黒いオーラに染まった星はグレスに飛び掛った。

「そうはいくか!」

飛び掛ってきた星の攻撃を避けるグレス。

星の動くスピードは速いが、直線的な攻撃である為、避けるのは簡単だ。

「親父のアレで止めるしかないな……闇封印!」

星の方に手を向けるグレス。

途端に星が苦しみだす。

「グウウウ……ああああああ!!」

星が叫んだ瞬間、体中のオーラが消滅し、星の状態は元の戻った。

「はあ……はあ……」

一方のグレスも星を押さえるのに体力を消耗したのか、息が切れていた。

星は辛うじて意識はあるようだが、体が殆ど動かない上、視界がぼんやりしている状態だった。

「……今度こそ止めをさしてやる……覚悟しろ!」

グレスは何処からかナイフを取り出し、星の方に投げた。

ナイフは星の頭の真ん中に刺さる筈だった。

だが刺さらなかったのだ。

一筋の電撃でそれは打ち落とされた。

「誰だ……?」

グレスは電撃が飛んできた方を見た。

そこには、体の回りに電気を纏ったレントラーの姿があった。

兄との三回戦 ジンムス登場（後書き）

星

「最後の奴って？」

解かる人には解かるさ（笑）

星

「教える！」

拒否る。さて……

星

「？」

逃げる！

星

「やっぱりそつなるのな（汗）」

復活（前書き）

あーやっと書けたークソ疲れたー

星

「うるせえよ（汗）で、今回は？」

読めば分かるって（笑）因みに若干文章の書き方変えてみました。
前とどっちが読みやすいか感想を下さい！

ではどうぞ！

復活

「お前は……………」

虚ろな目をした星は、自分を助けたその人物の姿を必死に見ようとしていた。見覚えがあった。やる気が抜けたような顔をしたレントラー。その電撃。あの声。間違いない、と星は確信した。

ソラだ……

「誰だ！」

攻撃を中断させられたGRESはそこに立っていたレントラーに思いつき睨みかかる。すかさずそのレントラーは答えた。

「地獄からの使者だ。観念しろ」

レントラーの答えを聞いたGRESは、怒りを倍増させた。だが、GRESもレントラーの声に聞き覚えがあったようだ。もちろん、GRESもその顔を知っていた。間違いない、ソラだ。

「貴様……………ソラだな……………」

「覚えてたか、おっさん」

ソラの挑発的な口調と言葉は相変わらずだった。その悪意たっぷりでシンプルな挑発の言葉はGRESの怒りを引き出す。

「クソ、あと少しだったのに……………邪魔が入るとは……………」

「来いよ！俺が怖いのか？」

GRESは今の状況を理解していた。星の暴走を抑える為に多くの力を使ったGRESの体力は限界だった。ソラもなかなかの実力者である為、うかつに戦ったら自分が命を落とすのは知っていた。天才のソラも相手が自分と戦うほどの体力がないの知っているからこそ、この強気だ。だがGRESはまだ何かを隠し持っているかもしれないから、GRESとの戦闘に入っていないのである。

だが、GRESには自分が絶対に死ぬことはない自信があった。GRESのすぐ横には星がいる。何故星がいるから、GRESは死なないと問われれば、答えは簡単だ。

人質。

「俺はお前とやりあうほどの体力はない。だからといってお前を恐れたりはしないが……こいつがどうなってもいいのか？」

落とした波導剣を拾うと、GRESはその刃を星の首筋に当てた。

「っ！……きたねえな……」

「何とでも言え。俺はまだ死ぬ訳にはいかない！」

GRESがソラにそう言った途端、空中から声がした。

『戻れ、GRES。引き上げる』

GRESは一瞬がっかりしたような表情をしたが、すぐに元の表情

に戻った。

「ボスの命令だ……命拾いしたな、星」

GRESはそう星に話しかけると、波導剣を捨てて姿を消した。ソラは星の所に走る。

「大丈夫か？」

「お前……何で……」

「話は後だ！レン達はどこだ！」

ソラは星を背負うと、いつでも走れる体制に入る。

「山頂だ……」

星は小さい声で話すと気を失った。ソラが山頂めがけて走り出す。

く山頂く

「おい、星の様子を見に行くぞ！」

レンはメンバーに声をかける。シン達は黙って頷いた。

「ん？」

ドドドドと、奇妙な音を聞いたレンは下の方を見る。何かが物凄い勢いで走ってくる。

「何だ！？」

凄い勢いで走ってきた何かは、山頂に到着した。ソラだった。

「お前は……ソラか！？」

思いつきり驚くレン。他のメンバーも仰天した。ソラは死んだはずだった。

「ああ。それよりも、星がやばい！」

ソラが星を降ろすと、ジンムスが駆け寄ってくる。星の胸に耳を当て、脈を調べた。

「いかん！このガキ、心不全を起こしとる！早く治療せんと死ぬぞ！」

心不全とは、心臓のポンプ機能が低下して、臓器が必要としている血液を十分に提供できなくなった状態のこと。暴走した時と、それを急に止められたせいで、心臓に何かの負担がかかったようだ。

「ど、どうすれば？」

シンがおどおどした声でジンムスに尋ねる。ジンムスは少し考えてから、何かを思い出したかのように天空へ上っていった。そして何か薬のような物を持ってすぐに降りてきた。

「それは？」

「我が昔に作った薬だ。一種の万病薬だが、効くかどうか……」

ジンムスは星に薬を飲ませる。薬を飲んだ星は5秒間の間、苦しんでいたが、すぐに落ち着いていた。

「どうやら効いたみたいだな……」

ソラがつぶやく。それを聞いたレンは思い出したかのように、ソラに尋ねた。

「ソラ、お前何で生きてる？あの時死んだんじゃ……」

「ああ、あの時確かに俺は死んだ。だが、向こうの世界でミュウに会ったのさ」

ミュウは前に、星が大暴走を起こしたときに、ソラ達を助けた、あのミュウだ。

「あいつは俺にはまだやることがあると云って俺を生き返らせたんだ」

「……ミントとルルは？」

シンがソラに聞く。ソラは少し暗い表情をした。

「あいつらは生き返ることはできなかった。ミュウの上にいる奴から復活させるなどの命令があったらしい。ただ、ミュウはそれに反論して、上の奴らが復活させるかどうかの論議をしているらしい」

ソラの話聞いたシンはまだ望みがあるかと、ホッとした。

「そういえば、貴様らは何のようで我の所にきたのだ？」

「実は、僕たちに修行をつけてほしいんです」

シンはジンスに目的を告げた。ジンスは一瞬驚いた表情を見せたが、笑って、「いいだろう」と返事した。

「今日はもう疲れただろう。我に乗れ」

ジンスに言われて、全員がジンスに乗る。星はレンに担がれている。ジンスは天空に飛んでいった。

復活（後書き）

星

「おおおおおおお！！ソラが！」

ソラ

「はぁ……また帰ってきちゃったか……」

そうガツカリするな（笑）

ソラ

「はぁ……」

こいつは……（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4960h/>

ポケモン 星の大冒険

2010年10月10日19時21分発行